
狂いし悲しみ

狂愛花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂いし悲しみ

【コード】

N0441T

【作者名】

狂愛花

【あらすじ】

死刑宣告を受けて死刑になって死んだ筈の主人公・竹神^{たけがみ} 駈音気^{かるね}がつけば目の前に神と名乗る女性がいて「リリカルなのはの世界に転生してもらっわ」と言ってきた。

駈音に与えられた新たな人生 一体どんな災厄が待ち受けているのだろうか？

プロローグ（前書き）

ヤンデレや狂い物の苦手な方は、ご遠慮ください

プロローグ

無。それが少年の目覚めて最初に見た光景だった。

「此処は、何処だ？」

少年は、辺りを見渡しながらそう呟いた。

「確か俺は……。」

少年は、自分に何が起きたのか記憶の糸を手繰りながら思い出していた。

「思い出した！ あの時俺は死刑になっただけ、なのに何故、俺は、生きている。」

「あなたには、して貰う事があるから此処に呼んだの」

「！？」

少年は、声のする方に目を向けた。

「あなたは？」

少年は、目の前にいる女性を少々威嚇しながら見つめる

「初めまして。竹神 駈音君。私は、殺戮の女神カーリー。よろしくね。」

「神、だと？」

少年、墓、駈音は、目の前にいる自分を「神」と名乗る女性を見つめたまま呆然としていた。

「で、その殺戮の女神様ともあろう方が俺に、何の用ですか？」

「あなたに、ある世界に行ってほしいの。」

「ある世界？それってつまり転生とか言うのですか？」

「ええ、そうよ。」

そう女神が答えると駈音は、その場にごろんと横になってしまった。

「いやだね。俺わ束縛されるのが嫌いなんだ。」

「あら、残念。その世界に行けばもっと多くの人間を殺せるのに。残念。」

の。」

「!?!?」

女神の口から出た予想外の回答に駄音は、驚きを隠しきれなかった。

「ちなみにその世界には、あなたと同じ転生者が居るわ。」

「.....」

駄音は、自分と同じ転生者が居ることをきいて何かを真剣に考えていた。

「どうかしたの?」

女神が何か考えている駄音が気になって聞いてみた。

「俺にその世界で何をさせる気だ?」

「!?!?きずいてたんだ。」

女神は、驚いた顔を浮かべた後ばれたかと言う顔で駄音を見た。

「いくら殺戮の神でも死刑になった罪人を何の理由もなく転生プラス能力つてのあなたなんか裏があるって普通思っさ。」

「そうよね。普通誰でも思っわよね。別に隠してたわけじゃないんだけどつい言いそびれて言うの忘れたのよ。御免なさい。」

女神は、頭をかきながら駄音に謝罪を述べた。

「で、俺は、その世界で何をすればいいんだ?」

「あなたは、その世界である者達と戦ってもらっわ。」

t o b e c o n t i n u e d

第零話（前書き）

やっと次話書けました。

さあ、駄音は、これからどうなるのかそれでは、御覧下さい。

第零話

「ある者達って、そいつら何者なんだ？」

「その者達は、あなたの敵や悪等のイメージが具現化した者達なの。」

「!？」

女神の口から発せられた答えに駈音は、驚きを隠せずにはいた。

「その者達は、その世界で密かに暗躍しているの幾ら神様でも直接世界に干渉できないのよ。そこでその者達を作り出した親である君に処理をして貰おうと君を転生させることになったの。」

「親と言われても自覚ないし作り出した覚えも無いんだけどな〜でも要は、皆殺しにすればいいんだろ。」

駈音は、上を見ながら頂垂れた後ゆっくりと女神を見据えた。

殺気の籠った光亡き瞳で。

女神は、少し殺気に圧され後ずさってしまったが「え、ええ」と駈音の問いになんとか答えた。

(この子、一体何なの仮にも神である私を睨んだだけで威圧するなんて一体何なのよ!?)

「なあ、その世界にも僕と同じ転生者が居るんだろ。」

「え、ええ居るけどそれがどうかしたの？」

「そいつらどんな姿でどんな性格でどんな力を持っているのか気になつてな、悪いけど教えてくれないか？」

「ええ、いいわよ。でも、そんなの知って如何するの？」

女神が疑問を駈音に聞いてみると駈音は、不敵な笑みを浮かべながら答えた。

「もしそいつらが俺の邪魔や気に食わない事したら殺さなくちゃいけないからその時に相手の性格や能力の事を知っていれば手間無く殺せるだろ」

「え、ええ」

女神は、又しても人間相手に恐怖してしまった。

(この子だけは、敵に回しちゃ駄目ねきつといや絶対殺される)

女神は、心の中でそう思った。

「じゃあ僕そろそろ修行しに行くね。」

「ええ、気よつけてね。」

「おう！」

フウ、ウォン！

駈音が目を瞑ると駈音の足元に赤黒い禍々しい魔法陣が現れたと同時に駈音は、闇に包まれ消えた。

「はあ、そろそろ出てきたらどうですか？」

シュン！

女神がそう言うのと突如女神の後ろに長い黒髪に黒い鎧を身に纏った女性が現れた。

「悪いね無理言っちゃまってこの見返りは、必ずするよ。」

「うん、お願いね。それより」

「ん？」

「何なのよあの子殺戮の神である私を睨み一つで恐怖させるなんてそれに所々しゃべり方変わったわよ一体何なのよあの子。」

「うんなんて言えば良いのか分かんないけど簡単に言えば『人間界の貴女』よ」

「はあ？何それ？」

女神が女性に聞いてみたが女性は、「今に分かるよ」といつて何処かに行ってしまった。

一人取り残された女神カーリーは、ハアとため息を吐いた後、駈音が消えた方を見ながら「一体何なのよ。」と呟いた。

第零話（後書き）

作「カーリーどうだった？」

カ「駈音怖すぎ一体どんな設定にしたの？」

作「まだそれは、お教えできません」

カ「ぶくケチちよつとくらい良いじゃない」

作「殺すよ。ニコッ」

カ「すみませんでしたー！ー！」

作「それでは、次回お楽しみに！」

第巻話

?

何処からか聞こえる口笛の音色。

?

?

如何やら口笛を吹いているのは青年らしい

? カチャ!

突然青年頭に拳銃が突き付けられた。

「何のんきに口笛なんか吹いてんだよ“駈音”」

青年の正体は駈音だった。

「何か用か?」

「何か用か? つじゃねよ! お前如何言う事なんだよ、あんな奴らの家族になつてしかもニートを演じるなんて、一体何がしたいんだよ。」

そう言つて声の主である女性は、悪態をつきながら駈音に問いかけた。

「フツ、フフフ、ハハハハハハハハハハ!」

「ッ!？」

駈音は突然狂った様に笑い出した。

突然の事に驚きを隠せずにした女性は、駈音を呆れた表情で見っていた。

(時々、こいつが何考えてんのか分かんねえ時がある)

side out

side ????

聖王教会の一室で教会騎士団の騎士、カリム・グラスシアが友人である元機動六課部隊長である八神はやとと元機動六課、スターズ隊、ライトニング隊の隊長、副隊長である高町なのはとフェイト・T・ハラオウン、シグナム、ヴィータ、そして転生者である藤堂彰と龍宮亮牙と夏目夏菜が深刻な表情で座っている。

「皆に集まってもらったのは他でもない今、地球とミットチルダを襲撃している転生者とは別に、新たな予言が現れたの」

その言葉に全員が驚きを隠せずにいた。

「カリムその予言にはなんて書いてあったんだ？」

「悪しき正義、その者狂気を纏い、夢幻の母にして終滅者。

千の屍に腰を据え、奏でる音色は、生者に絶望を死者に幸福を与えん。」

グラシアの告げた予言を聞いた面々は困惑や恐怖するものがいた。

その時、一室のドアが勢いよく開きグラシアの秘書であるシャツハ・
又エラが入って来た。

「大変です！地球とミットチルダ両方にて転生者が出現！それも物
凄い数です！」

「な、なんですって！？」

「皆行くで！」

「「「「了解！」「」「」」

そうやって八神達は先に地球とミットチルダに向かっていったフオワ
ード達のもとに向かった。

s i d e o u t

s i d e i n e a r t h

「デリヤー！」

「ぐうああ！！！」

「ハアー！」

「ぐう！！！」

今現在、転生者と戦闘を繰り返しているのは、元機動六課、スターズ隊所属のスバル・ナカジマとティアナ・ランスターだった。

「ハア、ハア、ハア、」

「ゼー、ゼー、ゼー、ティア大丈夫？まだやれる？」

「はあ、はあ、大丈夫にきまつてるでしょ！馬鹿スバル！」

「大丈夫！二人とも！」

聞き覚えのある声に二人はバツと空を見上げるとそこにいたのは・

「「なのはさん！」」

t o b e c o n t i n r e d

第貳話

「なのはさん！」

ランスターとナカジマの目線の先には転生者に砲撃を撃とうとしている高町の姿とその後ろで高町を守っているかの様な姿のヴィータがいた。

「デイベイン・・・!?」

高町がそう言い終える前にある異変に気がついた。

「なんで・・・」

「・・・なのは(さん)?」

一向に砲撃を放たない高町にランスター達が問いかける。

「デイベイン・バスターが“出ない”」

「・・・!?」

高町の思いもよらない発言にランスター達が驚愕の色を現した。

その様子を見ていた転生者の一人が笑いながら高町達に言った。

「俺様の力でテメエらの魔法は無力化したんだよ！」

「まさか、シグナム達も!?」

「!?!」

武器を振り上げた転生者の男が声のする方に目を向けるとそこには、何者かに胸を貫かれた別の転生者が居た。

「何だおまグウアー!」

仲間を殺した奴に向かって行った転生者はそいつの攻撃により首が吹き飛んだ。

その光景を見ていた転生者達はそいつに感じた事のない恐怖に襲われ我を忘れてそいつに向かって行ったが全員、そいつの攻撃で黒こげになった。

「なんなんだ、一体、」

一人残った転生者の男は目の前で起こった出来事が未だに信じられずにいた。

side out

side in earth

ドサッ

そんな音を立ててまた一人転生者が高町達の前で死んでいった。

「軟弱な、まったく相手にならん」

そう言ったのはカブトムシをモチーフにした怪人だった。

「なんだてめえ！」

ヴィータがカブトムシ（通称）に問いかける。

「ん？誰かと思えば貴様か」

「え？」

「今回はあいつは一緒ではないのか？」

「何を言ってるんだ」

「まあいいおまえを殺せば自然と出てくるだろう」

「だからさっきから何を言って・・・」

グーン！

「クッ！」

ヴィータはカブトムシが放った拳を寸前のところでかわした。

「集中しなければ死ぬぞ」

「ハァー！」

「デリヤーー！」

「ハア〜ハア！」

「フン！」

「「「きゃー！ー！ー！ー！」」」

カブトムシは高町達3人の攻撃を裏拳で相殺さした。

ダッ！

「!?!」

「又ン！」

「ああー！ー！ー！ー！」

カブトムシは上空にいたヴィータに向かって飛びあがり強烈なナツクルをお見舞いしその衝撃でヴィータは3人の下まで転がって行った。

「……失望したぞ貴様の強さはそんな物か」

そう言ってカブトムシはじりじりとヴィータ達に近ずいて行った。

「はあ、はあ、はあ、」

「フン、もういい此処で死ね」

カブトムシは拳を振り上げ勢いよく拳を振りおろした。

しかし、衝撃が何時まで経っても来ないのを不思議に思い閉じていた瞼を開くとそこには・・・

桜柄の振袖を纏い桃色の髪を靡かせている女性と紅葉柄の振袖を纏った赤い髪の女性が立っていた。

「相手を間違えないでくださいよ“ガドル”」

赤い髪の女性が言った。

如何やらあのカブトムシはガドルと言うらしい。

「如何やらそ奴は貴様に似ていただけのようだ」

「ええ、だから貴方の相手は私達ですよ。」

高町達は目の前にいる人物に驚きが隠せずに行った。

何故なら其処に居たのはT・ハラオウンと共にミッドチルダに残り戦っているシグナムと此処にいるヴィータが目の前に居るのだから。

t o b e c o n t i n r d e

第参話

T・ハラオウン達の目の前には今、赤い髪 of 青年が立っていた。

「何だお前は」

先に口を開いたのは一人生き残った転生者の男だった。

「醜いねえ」

「何？」

「君の事だよ、美しくないって言ってるんだよ」

青年は薔薇を啜えて男に言った。

「フン！戦士に美しいも醜いも無いんだよ！分かったか？青二才！」

男のその言葉に青年は啜えていた薔薇を落としそうになったが寸前のところでキャッチし、体を起こした時の青年の瞳には明らかに殺意が宿っていた。

「君、生意気だね。どっちがいい？拷問されて死ぬのと一撃で死ぬのと」

「やれるもんなら、やって・・・」

男がそう言い終える前に青年はさっきいた場所から瞬時に移動し、いつの間にか男の後ろに居た。

「決めた。君、一撃で殺してあげるよ」

「!?!」

男が振り向く前に青年が自身の腕で男の体を貫いた。

「なっ!?!」

「ゴフツ!」

T・ハラオウンは咄嗟にモンディアルとル・ルシエの目を塞ぎ目の前で起きている悲惨な光景から背けさせた。

ブン!

青年は腕を横に振り貫いていた男の体を放り投げた。

男の体は地面にガツ!つという音を立てて燃え盛る炎の中に入った。

「冥土の土産に教えてあげるよ。僕の名前は“絶鬼” あつでももう冥土に召されてるか」

そう言って青年、基、絶鬼は燃える男の死体を見て高笑いを挙げた。

「さて、お次はっ」と

絶鬼は視線をシグナム達に向けた。

「どござって殺してあげようかな」

「クッ！」

絶鬼の狂った笑みをを浮かべながら一步一步シグナム達に近づいて行く。

「絶鬼、相手を間違えていませんか？」

「!?!」

絶鬼は声の主を探してあちらこちら見渡した。

「じつちよ」

「!?!」

その声とともに空から二人の少年と少女が下りて来た。

「!?!」

突然の事に驚きを隠せなかったが再び驚愕した。

其処に居たのは……。

「エリオ? キャロ?」

T・ハラオウンの隣に居るモンディアルとル・ルシエだった。

s i d e o u t

s i d e i n e a r t h

「ヴィータ副隊長が二人!?」

ナカジマが目の前に居る二人のヴィータとミッドチルダで戦っているはずのシグナムに混乱していた。

「フン、漸く来たか“桜”“椀”」

「それはすみません。しかし、こちらにも事情と言う物が有りまして」

ガドルの問いかけに桜と呼ばれたシグナム似の女性が謝罪の言葉を述べた。

「その代わりに、たっぷり満足さしてあげます。」

そう言ったのはヴィータ似の椀と呼ばれる少女が述べた。

「それでは、満足さしてもらおうか」

「ええ」

「もちろん」

そう言い終わると3人はその場から消え上空で衝撃波が起きた。

「又ン！」

ガドルは桜に向かって手刀を横薙ぎにはらった。

「フン！」

桜はその手刀を刀で防ぎ左手に持つ鞘でガドルを斬りかかった。

「ハアー！」

「！」

ガン！

ガドルは自身の胸にある装飾品を一つちぎるとその装飾品は形状を変え剣の形となり桜の三日月状の鎌を受け止めた。

「相変わらず変な力ですね」

「貴様もな」

ガン！

そう言ってガドルと桜は空中で武器をぶつけ合ったいた。

「後ろがから空きですよ」

「！？」

ガドルが後ろをバツ！と振り返るとそこには、居合切りの体制に入

っていた桜の姿があった。

「ハァー!!!!」

「クツ！」

ガドルはギリギリの所で居合切りを交わし地上に降下し着地した。

「少し分が悪い、今日の所は引かせてもらう」

そう言っただドルは高く跳びあがり去って行った。

「行ってしまいましたね。追いますか？桜姉さま」

「いえ、止めておきましょう。早く戻らねばなりませんから。」

「はい」

椀は桜の返答に頷き去ろうとした時。

「待って下さい!」

そう言ったのは、高町だった。

「何か？」

「あなた達は一体？」

「貴方達には関係ありません」

椀の返答にヴィータが異論を唱えた。

「何だっつてんだテメエらは！名前ぐらい言えよ！」

ヴィータの問いに椀が溜息を吐きながら答えた。

「良いでしょう。私は椀」

「私は桜」

「これでいいでしょう。では、私たちはこれで」

「縁があつたらまた何処かでお会いしましょう。」

そう言つて椀と桜は転移していった。

残つた高町達は転移していった桜と椀の名を呟いていた。

t o b e c o n t i n r d e

第四話

「エリオ？キヤロ？」

T・ハラオウンは自分の後ろに居るはずのモンディアルとル・ルシエが目の前で先程まで転生者を皆殺しにした絶鬼に睨んでいる光景を見て困惑の声を挙げた。

「そろそろ来る頃だと思ったよ“同類”君」

そう言っただけで絶鬼は自分の腕を変形させ青白い剣になった。

「フン、貴方と一緒にしないでください。悪鬼である貴方と」

そう言っただけでル・ルシエに似た少女が絶鬼を睨みつけた。

「止める、“桜鬼”」

ル・ルシエ似の少女、基、桜鬼はモンディアル似の少年の制止に異論を称え様としたが少年の睨みで桜鬼は何も言えなくなってしまった。

「絶鬼、我々は貴方に礼と警告を伝えに来ました。」

「お礼と警告？」

絶鬼が少年に聞くと

「まず、礼は邪魔な転生者の排除、警告は、今から貴方を殺します」

ので覚悟してくださいって事ですっよ！」

そう言っつて、少年は絶鬼に目掛け何かを投げつけた。

「クツ！こんな物・・・！？」

絶鬼は少年が投げつけた物をキャッチし地面に叩き付け様とした時、少年と桜鬼が何かしようとしてるのが絶鬼の目に入った。

桜鬼は左腕を空に掲げ左腕に付いている弦の付いた装飾品の弦を右腕で鳴らし、少年は右手に持っている音叉の様な物を左手に当て音を立て音叉を自分の額に翳した。

すると、桜鬼の真下から桜の花弁が舞い上がり、少年は体を青い炎が包み込み、二人の姿は桜の花弁と青い炎で見えなくなったと思ったら突然。

「「ハア！！」」

二人は自分達を包む花弁と炎を腕で払うと其処に居たのは、人ではなく二匹の異形の存在であった。

「そつちが本気なら僕も」

そう言っつて絶鬼の体が二人以上に異形の存在になった。

その光景を見たＴ・ハラウン達は一言呟いた。

“鬼”だと。

「行くぞ桜鬼」

「ええ、」

「さあ、来い！鬼の成り損ない！」

その声と共に絶鬼が二人に攻撃を仕掛けた。

絶鬼は右腕で桜鬼を斬り裂こうとしたが桜鬼は腰に提げていた折りたたみ式の弦の付いた槍を取り出し絶鬼の攻撃を防ぎその槍で絶鬼に斬りかかったがかわされた。

「ハア〜ハア〜！」

少年は何処かから槍を取り出しその槍に炎を灯しその炎を絶鬼に放った。

「ハア！」

絶鬼は炎に掌を向け電撃を放った。

炎と雷いかずちが激突し激しい爆発と爆雲が吹き荒れた。

「ダアリヤー！」

「カア〜！」

少年は槍で絶鬼に殴りかかり絶鬼は拳を少年に放った。

バァン！！

槍と拳がぶつかり大きな衝撃波が辺りに飛んで行った。

「ハァー！」

「！」

絶鬼は後ろから自分を突き刺そうと槍を構えている桜鬼が目に入り咄嗟にその攻撃を避け様とした時、

「ダアリヤ！！！」

「グア！」

少年が炎の灯った槍で絶鬼に一撃を叩きこんだ。

「クツ！半妖の分際で！グァー！！！」

倒れかけた絶鬼は何とか踏ん張り立ち直し自分の体に傷を付けた少年を睨みつけていた時、後ろから桜鬼が槍で絶鬼を斬り裂いた。

「桜鬼！音撃行くぞ！」

「わかった！」

少年は持っていた槍を吹き矢の様に使い絶鬼に赤い光の弾を撃ち込み桜鬼は槍を絶鬼に突き刺しバツクルについていた弦の核を槍に装着し少年が持っていた物と同じ音叉を取り出しその音叉を刀に変え少年は槍を今度はフルートの様に吹こうと桜鬼は突き刺した槍をチエロの様引こうとした時。

「其処までだ」

「「!？」」

突如、威圧するような声が響少年と桜鬼は声の方を向くと其処に居たのは黄金の様な物で身を包んだ者だった。

「すまないが絶鬼を返して貰えるかな？」

低い声が再び響た声からしてたぶん男であろうかその黄金の男が徐々に桜鬼達に近ずき其れに危険を感じた少年が桜鬼と共に絶鬼から離れた。

「哀れだな」

「フン如何かな？」

そう言と絶鬼の体から何本もの刃が飛び出した。

其れを見た少年は舌打ちをし桜鬼は苛立ちから絶鬼から目を離した。

黄金の男は鼻で少し笑った後少年達に目をやった。

「次会うときは必ず貴様らを殺す」

「此方も受けて立ちます」

二人はそう言ってお互いに睨み合い二人同時に目を離した。

「さらばだ！少年達よ！」

「次は、殺してあげるよ」

そう言い残して二人は灰色の空間に消えて行った。

「怪我はないか？」

そう言つて少年がT・ハラオウンに聞いた。

「え、ええ、大丈夫です」

「あの！助けてくださつてありがとうございます！」

そう言つてモンディアルが少年達に頭を下げた。

「いや、別にいいこつちも仕事をしたまでの事」

「それでは、我々はこれで」

そう言つて去つて行くとした二人をシグナムが呼びとめた。

「待つてくれ！」

「ん？」

「何ですか？」

「お前達の名を覚えてくれないか？」

「良いでしょう私は桜鬼」

「私は“貫鬼”（ツラヌキ）これでいいですか？」

その問いにシグナムはただ縦にうなずいた。

「行くぞ桜鬼」

そう言つて貫鬼は陣を作り桜鬼と共に転移して行つた。

残されたシグナム達は転移して行つた二人の名を呟きながら空を見上げた。

s i d e o u t

s i d e ? ? ?

暗い闇の中で誰かが本を読んでいた。

暗いのに文字が読めるのか？と疑問に思いがちだ。

誰か本を閉じ本を机に置き指を鳴らした。

すると、ランプに火が灯り部屋が明るくなった。

明るくなった部屋の中には数人の男女がいた。

「どうだった？」

「奴らも本格的に動いて来た様だ」

「ならこつちも本気で行かないとね」

「ああ、そうだな貫鬼、桜鬼、桜さん、椋、情報は以上か？」

その声に四人は頷いた。

「戦争が、始るな“ 駈音”」

その声に椅子に座っていた駈音が不気味に微笑んだ。

t o b e c o n t i n r d e

第五話

地球とミッドチルダでの戦闘がある意味終了し、高町達は八神に自分達が見た者の事を話した。

「うーん、シグナムとヴィータにそっくりな人物な」

「副隊長達だけじゃなくて、僕達のそっくりさんまで現れるなんて」

「主、大丈夫でしょうか、奴らは我々に化け何かを企んでいるのでは」

シグナムの発言に全員が暗い顔を浮かべた。

「なのはちゃん達の話聞く限り、そのガドルと絶鬼って言う人物はそっくりさん達と知り合い見たいやけど仲間ではないな戦ってる時点で、よし！この話はまた後日するとして、皆今日の事覚えてるか？」

暗かった一同が八神の発言で全員がズッコケタ。

「う、うん覚えてるよ。」

「東雲さんの家に戦争で家を焼かれた子を養子にしたんだよね」

「せや！今日、皆でパーティー開いてその子の歓迎会するんや！」

八神の言葉に高町達が頷いた。

「じゃあ、皆行こうか！」

『オォー！』

八神達は地球に転移して行った。

しかし、彼女達は知らなかった。

その先の、まだ見ぬ“地獄に”

s i d e o u t

s i d e ? ? ?

グルウルウルウルウ

何処かから聞こえる獣の唸り声。

グウ！

その獣は自分の後ろに何かを感じ振り返った。

其処には、まるで鏡を見ているかの様に自分にそっくりな装備をした者が居た。

獣は二足歩行で両腕にガントレットらしき物を装着しており、靴はネコ科の肉食動物をイメージした金属製のブーツ、体には、腰回りに金属製の垂れが5枚、胸にはこれまた金属製の防具が有り、一番印象的なのは、顔の仮面と頭のドレッドヘアだった。

しかし、その獣の前に居る獣と同じ武装をした者はその獣とハッキリと違う箇所がある。

それは、髪型と体の大きさである。

その獣は身長230センチぐらいあるのだが、相手は170センチぐらいしかないのだ。

そして、髪型は獣はドレッドヘアで相手は普通のセミロングなのだ。

その獣の頭で考えられた事は、目の前に居るこいつは仲間を殺しその装備を奪った。

そう考えただけで獣は仲間を相手に無傷で勝ち武器を奪ったこいつを狩ってみたいと。

グウア！

「止めてくれ！俺は獲物じゃない！」

そう叫んだのは相手だった。

相手はゆっくりと自分の体の装備を一つずつ順に外し、最後に仮面を外して地面に落した。

グルウルウ・・・

獣は唸りながら相手に近ずいて行き相手の首をつかみ顔を右に左に

動かした後、首を離し自分の付けていた仮面を外し相手に自分の素顔を見せた。

ブオアー！

獣は相手に向かって威嚇交じりの咆哮を喰らわしたが相手は怯む事無く獣の目を見つづけた。

其れを見た獣は叫ぶのを止め、相手の目を見た。

「ありがとう、此方の要望を聞き入れてくれて」

【何が、望だ？】

「今から俺はこの近くの屋敷で少し過ごしますのでその間だけ屋敷に近づく獲物を狩ってほしいんだ。これが獲物のリストです」

そうやって相手は獣にリストを渡し獣はリストを一通り見るとリストを破いた。

【良いだろう、我名は、ザ・デリート・プレデター】

「俺は、竹神駈音だ」

そうやって駈音とザ・デリートはお互いに頷き、装備をつけ直しザ・デリートは体を透明にし何処かに消え、駈音は装備だけを隠し明りのついている屋敷に歩いて行った。

side out

side in earth

所変わって此処、地球では・・・

「久しぶりだな土郎」

そう言ったのは黒髪の見た目二十歳の男性だった。

「そうだな、“大地”」

そう言っ二人は握手を交わした。

「なのは！久しぶりね！」

「なのはちゃん元気だった？」

「アリスちゃん、すずかちゃん久しぶり！あたしは元気だったよ！」

そう言っ高町は友人のアリス・バニングスと月村すずかと談笑していた。

其処にT・ハラオウンや八神たちがやってきて皆を混ぜて談笑していた。

因みに、今皆が居る場者はバニングスの別荘である。

この別荘に集まったのはハラオウン家、高町家、月村家、聖王教会の騎士二人、フォワード陣、八神家、ナカジマ家、転生者3人、土郎の友人である東雲家の計34人である。

「しかし、少し遅いな」

そう言ったのは東雲家の大黒柱、東雲大地だった。

「大地さん、心配しすぎですよ。その内来ますわ」

大地の隣に居るのは大地の妻、東雲薫^{かおり}である。

「二人ともあいつを甘やかし過ぎ」

「彩姉何でそこまでお兄ちゃんを嫌うの？」

この二人は大地と薫の娘である次女彩花、三女瑠璃である。

「彩、あの子は戦争の犠牲者なのよ少しぐらい甘やかしても良いんじゃない？」

この人が長女の光である。

「其れなら良いと思ったけど、いざ暮らしてみたら何よ！あの暮らし方！まんまニートじゃない！」

「そうよね！そんな奴は甘やかしすぎよね！」

彩花の意見にアリサが同意し此処に居ない東雲家の養子を罵倒し倒した。

「二人とも落ち着け」

「そうよ、本人に言わないと其れ意味無いよ」

彰と夏菜が二人を落ち着かせた時、外に誰かが立っていた。

その姿は如何やら青年の様でその青年を見た大地がその青年に近づいて行った。

「よく来たね、ささ中に入って」

大地に促され青年はさっきまで大地が座っていた場所に座り大地はその隣に座った。

「じゃあ、自己紹介しようか彼がさっき言ってた子でアスカ君だ」

「初めまして、私は高町士郎よろしく」

「私は妻の桃子でこっちは息子と娘の恭也と美由紀となのは」

そう言って各々の紹介が終わり皆が別々に話をしたりお菓子を食べたりしている中、アスカだけは暗い雰囲気を漂わせながら何かをしている。

「アスカさん、其れ何やってるんスか？」

気になったスバルがアスカに聞いてみた。

「ああ、これは、歌だよ」

アスカの返答にスバルは驚いた顔をしながらアスカに再び話しかけた。

「へえ〜！歌を書いているんですか、どんな歌何ですか？」

「いろんな歌だよ、見てみるかい？」

アスカの言葉にスバルは首をブンブン縦に振りアスカからノートを受け取った。

スバルは楽しげな顔でノートに見入っていた。

すると、だんだんスバルの目に光る者が溢れ出してきた。

「どうでした？」

アスカの問いにスバルは涙を拭いながらノートを返した。

「とっても感動しました！」

スバルの答えにアスカは満面の笑みで喜んだ。

「君なら見せても良いかな」

「え？」

アスカはそう呟きながら自分のカバンから別のノートを取り出し、それをスバルに渡した。

「何すかこれ？」

スバルはアスカに聞くとアスカは笑顔で「読んでみて」といった。

よく分からずスバルがノートを開いた。

其処には……。

「これ……」

ノートには幻想的な風景や薔薇などの花が満面無く書いてあった。

「ハア〜、ウア〜」

スバルは言葉を失いノートの絵をじっくり見ていた。

すると、又してもスバルの目に涙が溢れだしてきた。

ノートを読み終えたスバルはアスカからハンカチを受けとり涙を拭きアスカにハンカチを返そうとした時、隣にアスカの姿はなかった。

アスカを探そうと外に出ると湖の岩場に腰を下して月を見ているアスカを見つけた。

「アスカさん、ハンカチありがとうございます」

スバルはアスカにハンカチを渡しアスカの隣に座った。

アスカはスバルに呼ばれ振り返りハンカチを受け取った。

「あの、少し聞いていいですか？」

突然、スバルが改まってアスカに話しかけた。

「いいよ」

「アスカさん周りかニートって言われてるんですけど、つらくないんですか？」

スバルが申し訳なさそうに聞くと。

「君は、俺の事、嫌い？」

「そんなわけないよ！」

アスカの問いにスバルは立ち上がり必死な表情でアスカの問いを全否定した。

その様子を見たアスカはニッコリと笑いスバルに言った。

「君達が居てくれるからだよ」

「え？」

「君みたいに俺の作品を褒めてくれるからだよ。君達の喜ぶ顔や君達が楽しんでいる事だけで俺は、生きていたいと思えるんだ」

アスカの言葉にスバルはまた感動し涙を流した。

そして、アスカはスバルが泣き終わるのを待ち続けた。

一通り泣き終えたスバルは顔を真っ赤にしてアスカに謝罪の言葉を述べた。

「す、すみません／＼」

「いいよ、其れに、俺も久しぶりに楽しんだし、ありがとう」

「い、いえ、此方こそありがとうございます！」

そう言うってお互いに頭を下げ顔を挙げて二人で大笑いした。

「あ！そうだ、これ」

「ん？何すかこれ？」

アスカはスバルに小さな小箱を渡した。

スバルが小箱を開けると其処には、光輝く指輪が入っていた。

其れを見たスバルは、頭の中が破裂しそうなくらいパニックになった。

「（こ、これって告白ってやつだよ／＼で、でもあたしにはまだ早いし、どうしよう）」

「俺、皆に内緒で仕事して、たまったお金で皆にお礼を兼ねて思っ
て買ったんだけど一個余ったから君にあげるよ。俺の作品を褒め
てくれたお礼として」

その言葉を聞いてスバルはホッとした。

「（ホッ、告白じゃないんだ。ちょっと残念、あれ？なんであたし

残念がつてんの？もしかしてあたしアスカさんの事／＼」

「それじゃあ戻ろうか」

「は、はい／＼」

そう言つて二人は皆の所に戻つて行つた。

別荘に戻るとスバルの父であるゲンヤと姉のギンガとパートナーのティアナが突然いなくなつたスバルを叱っていた。

「まったく、スバルはホントに・・・」

「馬鹿スバル！突然いなくなつてなのはさんがどんなに・・・」

「ごめん、」

スバルは正座しギンガとティアナの説教を受けていた。

「まあ、それは良いとして、スバル、アスカ君と何かあつたか？」

「ええ！／＼／」

ゲンヤの突然の言葉にスバルは赤面しながら否定したがはやてまで入ってきてスバルは顔を真っ赤にして皆から目をそらした。

「アスカ、お前はどうかん、！？」

ゲンヤがアスカの方を見るとそこには転生者に捕まりのどに剣を突き付けられているアスカの姿があつた。

「動くな、動けばこいつを殺す」

「クツ！アスカを離せ！そいつは関係無いだろうが！」

「こいつはスバルと親しくしてやがった、スバルは俺達の嫁なんだよー！」

人質が居るからゲンヤ達は動けずにいる、しかも、相手はどんな無茶苦茶な能力を持っているか分からないし相手は複数いる。

これは、絶望的だった。

と、そう思った時、アスカが転生者に話しかけた。

「ねえ、」

「ああ？」

「俺にさあ、“触らないでくれるかな”？」

「はあ？お前状況分かつんのか？」

転生者がそう言った次の瞬間。

「うあー！！！！」

「！？」

転生者の一人が“何か”に体を引き千切られ死んでいた。

アスカを掴んでいた転生者も他の奴らと円陣を組み敵の襲撃に備えた。

「アスカ君！大丈夫か？」

「大丈夫です。すぐ済みますから」

そう言うとアスカの右腕の手の甲から光が溢れだしアスカはその光に包まれた。

「な、何だ！？」

「ア、アスカ君！？」

光が消えるとそこに居たのは……。

「アスカ、君？」

漆黒の龍の鱗の様な鎧に身を包み、さっきまで黒い短髪だったのが長い深紅の髪になっていた。

「な、何だお前は！？」

そう叫んだ瞬間叫んだ転生者が見るも無残な死体になった。

「に、逃げろ！」

転生者が逃げようとした時、アスカ？が逃げて行く転生者を一人一人殺していった。

ほんの一瞬で転生者達は生者ではなく死者となり、アスカ？はその死体の上に腰をおろし優雅に口笛を吹いていた。

その光景を見たカリムが言った。

「千の屍に腰を据え、奏でる音色は、生者に絶望を死者に幸福を与えん。」

その言葉を聞いたなのは達がバツ！とカリムの方を向いた。

アスカは口笛を吹きながら自分の変身を解いた。

「アスカ君、今は・・・」

「need not to know」

そう言つてアスカは森の闇のに消えて行った。

残された者達はアスカが消えて行った方をただただ見ている事しかできなかった。

t o b e c o n t i n u e

第陸話

あの日から数日が過ぎ、全員に少しずつではあるが元気が戻って行った。

唯一人を除いて。

「ル、バル、スバル！」

「！？な、何ティア？」

「何じゃないわよ、あんたさつきからブーツとしてたでしょ」

「ごめん」

「あなた、まだアスカさんの事気にしてんの？」

ティアナの質問は核心を突いていた。

スバルは信じられなかった。

あんなに歌や絵が好きで、大地さん達にお礼の品まで買っていたアスカが皆の目の前で敵とは言え人を殺すなんて思いたくもなかった。

「スバル、こう言っちゃ悪いけど、アスカさんもあいつ等と同じ卑劣な転生者じゃないかかって、アスカさんはそんな人じゃないよ！
！」スバル、

「あんなに絵がうまくて、あんなに素敵な詞を書く人があんな奴ら

「同じにしないでよ！」

「でも、現にアスカさんは人を殺してるんだよ！」

「其れは、きつと、何か訳があるんだよ」

「人を殺して良い訳って何よ！」

又してもスバルはティアナに核心を突かれた。

其れは自分でも分かってた。

どんな理由が有ったとしても人を殺して良いわけがないって、自分でも分かってた。

分かってたけど、分からないふりをしていた。

「じゃあ、あたしが見つけてみせる！」

「スバル！」

そう言つてスバルは部屋から出て行つた。

残されたティアナはただただスバルが出て行つた方を見ていた。

「スバル、あんた本当にアスカさんの事・・・」

ティアナの眩きは誰にも聞かれずそのまま無に？き消された。

side out

スバルが出て行った事も知らずに聖王教会では、はやて達がカリムと話しあいをしていた。

「そのアスカ君って子、危険ね」

「私も同じ意見です。彰達転生者でも手こずっている転生者をたった一人で惨殺するなんて危険すぎます」

そう言ったのはフェイトの義兄であるクロノ・ハラオウンであった。

「でも、どう対処します？相手が其処まで強いなら逮捕に向かわせても被害者が増えるだけだし」

この青年はユーノ・スクライア。

過去になのはと共にジュエルシードと言うロストロギアを共に回収した中である。

「でも、転生者といいそつくりさんといい謎の敵といいその子といまったく、何で次から次えと問題が起こるのよ」

カリムのぼやきで一瞬ではあるが部屋の空気が和らいだ。

しかし、なのはだけは今だ暗い顔でいた。

「なのは、どうしたの？」

「え！？な、何でもないよ。ただ」

「ただ？」

「スバル、大丈夫かって」

「スバルがどうかしたのか？」

なのはの言葉を聞いていたクロノがなのはに聞いた。

「実は、スバルそのアスカ君のことが好きになったんだけど、目の前でアスカ君があんな事したから相当ショックを受けたから心配で」

「そうか……。でも、これはそう言う仕事なんだ任務に支障をきたす可能性があるからスバルはこの任務から外した方が良い」

「そう、だねそうし「なのは！大変だ！スバルが居なくなつた！」え！？」

部屋にいきなり入って来た彰が告げた言葉に全員が驚愕しあせり始めた。

スバルはアスカに会いに行ったのだた。

side out

side スバル

あたしは今地球に居る。

理由は、アスカさんを探すため。

最初はアスカさんが消えた森を探したけど、結局見つからなかった。

今はある方向に向かって飛んでいる。

あたしが向かっている場所、其れは……。

「やっと着いた。“まほひ幻島”」。

この場所を知ったのはとある噂のおかげだった。

その噂は、最近この海に地図にも載らない幻の島が現れると言つものだった。

自分自身、半信半疑だったかどなぜかアスカさんが此処に居ると直感で感じた。

でも、まさか本当に着けるなんて思わなかった。

「アスカさ〜ん！いますか〜！居たら返事してください〜！」

あたしは叫んだ。

ただ叫び続けた。

「!?!?」

叫んでいると何処からか音が聞こえて来た。

「アスカ、さん？」

あたしは聞こえて来た音を聞いて辺りを見渡したが何も見当たらない。

その音をよく聞いてみると口笛の音色だった。

その音色を聞いてあたしはすぐに頭に浮かんだのは。

「アスカさん！」

あたしは無我夢中で音色のする方に走った。

暫く走ると森を抜け、開けた場所に出た。

其処は、一面の花畑で、その真ん中に一人座り込み口笛を吹いていた。

その姿を見たあたしは声の限りに叫んだ。

「アスカさん！！！」

「？、！？？」

あたしの声に反応してその人はこっちを向いてくれてその顔は、何処からどう見ても“アスカさん”だった。

「スバル！？如何してここに？」

s i d e o u t

s i d e 三人称

「スバル！？如何してここに？」

アスカの前には此処に居るはずの無い存在のスバルが居る事に困惑している。

「ハア、ハア、ハア、アスカさん。貴方に聞きたい事が有ります。」

スバルは走ったせいで息は絶え絶えで改めて息を整えてからアスカに言った。

其れを聞いたアスカはスバルが何を聞きたいのかが分かっているかの様な姿勢でスバルの質問を待った。

「アスカさん。何故、人を殺したんですか？」

やっぱりと言わんばかりにアスカは溜息を吐きスバルの質問に答えた。

「奴らはこの世界で第三に危険を及ぼす存在だからだ。」

アスカの答えにスバルは「第三？」っと疑問の声を挙げた。

「第二はお前達が遭遇したガドルと絶鬼達だ」

「!？」

アスカの言葉にスバルは又しても驚愕した。

アスカが何故ガドルの事と絶鬼の事を知っているのかが気になって仕方なかった。

「第一は、この、“俺”だ」

「!？」

アスカの言葉に又又してもスバルは驚愕した。

「何を言ってる……」

「お前も見ただろ、俺のあの姿を、あれがこの世界を脅かす力なんだ」

「でも、それだったら彰さん達だって……」

「彰？ああ、あの転生者の事が、あいつ等は神が直接力を与えたから、別に危険じゃないんだよ」

「じゃあ、何で、アスカさんは危険なんですか？」

「其れは、その内分かるよ」

怪しげな笑みを浮かべながらアスカはスバルに言っと、突如として、霧が現れその霧はアスカを包み込みそのまま消えてしまった。

「アスカさん！」

スバルはアスカが消えた所に駆け寄りすぐに辺りを見渡すと、徐々に消えて行っている霧を見つけその霧を追いかけようとした時、スバルの目の前に何処かの軍服を着こんだ青髪の青年が立ちはだかつた。

「其処をどいてください！」

「これより先、通す訳にはいかん」

「それじゃあ、力ずくでも通して貰うっす！」

そう言つてスバルは自身のデバイスであるリボルバーナックルで青年に向かって行き、殴り掛ろうとしたが、いとも簡単にかわされ青年の腰に控えていた刀の斬撃がスバルを襲つた。

「ゲアガ！」

スバルはすぐに斬られた箇所を抑えたが出血も無ければ傷一つなかった。

「な、んで!？」

「俺の任務は、貴様を此処より先に行かせない事、貴様の命を奪う事は任務に無い」

青年の言葉にスバルは悔しさのあまり奥歯を噛み締めていた。

だが、現にスバルの体力はさっきのたった一撃で戦闘不能のギリギ

りまで削られたのだから。

すると突然、何処からか旋風が吹き、その風で青年の被っていた軍帽が空に舞い上がった。

青年は風に舞い上がった軍帽を手に取り、砂埃を叩き、再びスバルの方に向き直った。

「!？」

再び此方に向いた青年の顔を見たスバルは驚愕した。

何故なら、其処に居たのは……。

「あたし？」

そう、其処に居たのは、スバルの顔に酷似していた、青年の素顔だ

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e

つ
た。

第漆話

スバルが居なくなった。

其れは突然の知らせだった。

「皆、スバルが何処に行ったか知らない!？」

切羽詰まった表情でなのはフォワード達に問いかける。

「いえ、見てませんが、何かあったんですか？」

エリオの問いにフェイトがスバルが居なくなった事を告げた。

「スバルが居なくなったの、それで私達は、もしかしたらアスカ君を探しに行ったんじゃないかって思ってるの」

其れを聞いたティアナがなのはに話しかけた。

「なのはさん、スバルは、地球に向かいました。アスカさんが人を殺した、訳を、探しに」

ティアナの言葉でなのは達は最悪の事態を考えていた。

それは、アスカがスバルをその手に掛けるのではないかという事態である。

「はやてちゃん!」

「分かってる、全員でスバルの捜索に行くで！」

「「「「「「「了解！！！！」「」「」「」」

無事である、其れが捜索に出たメンバーの胸にある思いである。

side out

side スバル

あたしの目の前には、あたしにそっくりな顔の男性が刀を此方に向け、静かに佇んでいる。

「もう一度言う。

此処から先は、一歩たりとも進みません。
分かったら、大人しくしている事だ。」

男性はそう言うと、刀を懐に収め、近くにあつた木に凭れ掛つた。

「クツ、このまま引き下がるなんてできないよ！」

あたしは男性に向かってもう一度突っ込んで行った。

右手のリボルバーナックルを振りかざし男性目掛けて振り下した。

「フウ、学習能力の無い奴だ」

そう聞こえたのは前からではなく、後ろからだつた。

バツ！と振り返るとさっきまで木に凭れ掛っていた男性が刀を構え、あたしの後に居た。

「フン！」

「クツ！」

ギリギリの所で斬撃をかわし、態勢を立て直し、もう一度攻撃をしようとした時、男性がすぐ目の前に現れ、腕を掴まれ、一本背負いされ地面に叩きつけられた。

「ガハ！、クツ！、う！？」

あたしが起き上がるうとした時、首に切っ先を突き付けられた。

「今の状況が理解できるな、俺がこのままお前に刀を突き刺せば、お前は死ぬ」

男の言葉は痛いほど分かる。

しかし、自分はアスカさんと話し合うために来た。

だから、こんな所で死ぬわけにはいかない！。

「アスカさんと・・・」

「ん？」

「アスカさんと、話をさせてください。」

「……」

「アスカさんと、もう一度だけ、話をさせてください！お願いします！」

こんな事で、通して貰えるはず無いと分かってる。

けど、何もしないよりましだ！。

そう思っていた時、男の人が急に刀を納め、あたしに背を向けて歩き出した。

「お願いします！アスカさんともう一度だけ」

あたしは土下座してお願いした。

「何してる、置いて行くぞ」

「!?!」

その言葉を聞いて、あたしは顔を上げ、その男性を見た。

「俺は先に進ませないと言ったが話をさせないとは言っていないからな」

そう言っつて、また歩き出した男性を追いかけて行った。

男性について歩いていると、再び霧が現れた。

それも、普通の白い霧ではなく少し、桃色の霧だった。

「あの〜、この霧何なんですか？」

あたしは色違いの霧が気になり、男性に聞いた。

「ん？ああ、これか？これはな、“蚊の息”だ」

「みずちっ？」

「蚊と云うのはこの島の守り神だ。

この島が、幻島と呼ばれるのは蚊が吐くこの霧のおかげで俺達は静かに暮らせるんだ」

「へえ〜」

あたし、この島が好きになって来たな、そうだ！今度なのはさん達もさそ・・・って、あたし無断で来ちゃったから帰ったら怒られるな。

「ハア〜、」

あたしが溜息を吐き、ふと前を見ると、男性がなぜかこっちを見ていた。

やば、見られてた。

恥かしい〜。／／／

そう思っていると、霧が晴れ、目の前に開けた場所が現れた。

「あの〜、何処にアスカさんが？」

あたしが聞くと男性は、頬を吊り上げ不敵に笑った。

「ようこそ、スバル・ナカジマ殿、我らが都に」

「!?!」

そう言つと男性の後にブラックホールの様な物が現れた。

あたしは無意識にブラックホールもどきの中を覗き込むと其処には

「な!?!」

巨大な街、いや、都が存在した。

「こ、これは!?!」

「さあ、行きましようか」

そう言つて男の人はもどきの中に入って行った。

「え!?!あ、ん〜、ま、待ってください!」

もどきの中に入って行く男性に驚きちよつと入るのを躊躇つたが、置いて行かれそうだったから思い切つてもどきに飛び込んだ。

「ん?あ!、明るい、」

外から見たもどきの中は真っ暗だったけど、入ってみると外と同じ

で太陽が有って明るかった。

「あ、あの!」

「ん?」

「貴方のお名前を教えてください」

「俺の、名前?」

今思えばあたしはずっと心の中で男、男の人、男性等、いろんな呼び方をしてたので、そろそろ、呼び方を定着さしたかった。

しかし、教えてくれるだろうか?

「良いだろう」

案外簡単だった!

「俺の名は“蒼”そう 駈音直属部隊所属、階級は大佐だ」

そう言っつて蒼さんはあたしに敬礼した。

あたしも其れに攀られ慌てて蒼さんに敬礼した。

「時空管理局、機動六課スターズ隊所属、スターズ01、スバル・ナカジマ二等陸士であります!」

咄嗟に言っつてしまった自己紹介に蒼さんは必死に笑いを堪えていた。

うう、恥かしい！

ん？それより、

「蒼さん、駄音って何ですか？」

「ああ、お前に言ってなかったな、お前が言ってたアスカは偽名だ」

「え！？」

「本当の名は駄音と言っただ」

其れを聞いてまた、アスカさん、改め、駄音さんに聞かなければならない事が増えてしまった。

t o b e c o n t i n u e

第捌話

「スバル〜!」

「スバル!」

「スバルさ〜ん!」

なのは達は今、アスカが消えて行った森の中でスバルを探していた。

「ん?ツ!?!な、なのはさん!!!来てください!」

エリオの呼びかけでなのは達はエリオの所に集まった。

「如何したのエリオ?」

フェイトがエリオに尋ねてみると、エリオは小刻みに震えながら、後ろにある樹の幹をゆびさした。

『ツ!?!?』

全員の目に入ったものは、あの日見た、深紅の髪と同じ色をした、赤い、血だった。

「ん?ツ!?!?」

シグナムは不図に上を見上げると其処には、皮を剥がれ筋肉が丸見えになっている人間が肉の様に吊るされている地獄絵図となっていた。

「う、げえ〜」

「クッ！」

「酷い・・・」

「誰がこんな、こんな酷い事を・・・ッ!？」

全員、その光景から目を背けた。

「ッ!其処に居るのは何者だ!」

『!』

シグナムの叫びに全員がシグナムが目を向けている方向に目を向けた。

しかし、其処には誰も隠れるような木も林も藪も無かった。

「シグナム、気のせいとちゃう?」

「いえ、確かに其処に何か居ます」

シグナムはそう言い切った。

しかし、よくシグナムを見て見ると剣を構えてる手が、微かに震えているのをはやては見ていた。

すると、突然、何も無かった筈の場所から、仮面をつけた大柄な獣

が姿を現した。

『!?!?』

【お前は、良い感覚を、しているな】

獣はシグナムを見据えながら言った。

「貴様は、何者だ?、これは、貴様がやったのか?」

【ああ、そつだ】

獣の答えに、シグナムは自身のデバイスであるレヴァンティンを獣目掛けて斬りかかった。

しかし、シグナムの斬撃は簡単に獣の腕にある刃で受け止められてしまった。

「クツ! 貴様は、人の命を何だと思っているんだ!!」

ガン!

シグナムはもう一度獣に向かって行き、レヴァンティンを振り落としました。

【我は、あの者の、望みを、叶えたまでだ】

「あの者とは誰の事だ!」

【.....】

シグナムの問いに答えない獣に、はやて達が後方から砲撃を放った。

「スターライト・・・」

「サンダー・・・」

「響け、終焉の笛・・・」

その声に反応し獣はシグナムを突き飛ばし、仮面の左目の辺りからトライアングル型の赤い光がなのは達を捉え、獣の肩に乗っている銃の様なものから、高圧のプラズマが三弾発射された。

「「「きゃー！！！！」」」

「なのはさん！！」

「「「フェイトさん！！」」」

「「「「主^{はやて}(ちゃん)！！」」」」

攻撃を受け、飛ばされたなのは達の下にシグナム達が駆け寄った。

「私たちは大丈夫や、でも、うちのシュベルトクロイツが・・・」

はやての言葉にシグナム達のはやて達のデバイスを見て見るとはやてのアームドデバイス、シュベルトクロイツ、フェイトのバルディッシュ・アサルト、そして、なのはのレイジングハート・エクセリオンが大破していた。

「バルディツシュ！バルディツシュ！返事をして！」

「レイジングハート！レイジングハート！！」

何度叫んでも返事は返ってこない。

「てめえく、よくもなのはデバイスを！！」

「許さん！！！」

そう言っつてヴィータとシグナムが再び獣に向かって行った。

【安心しろ、急所は、外した。修理、すれば、治る】

「そう言っつ、問題じゃねんだよ！！！」

「やめろ……」

ヴィータが獣に突っ込んで行こうとした時、何処からか声が響き、全員の動きを止めた。

【お前か、】

「悪いけど、ここでの戦闘は控えてくれ」

「貴様は……」

全員の目は、ある人物を捉えていた。

その人物は。

「アスカ！！！！」

獣と親しく話すアスカの姿だった。

「アスカ君、スバルは何処？」

なのはは若干、殺気をこめた眼でアスカを見据えた。

しかし、なのはの殺気を感じてもアスカは微動だにしなかった。

「スバルさんなら、こっちで確りと保護してるよ」

「嘔吐くんじゃね！！！！」

その声に全員がヴィータを見た。

「何で嘘だと思うの？」

アスカはふざけた様に首をグイッと傾げた。

その光景を見たヴィータとシグナムが怒りを露にし、アスカを怒鳴りつけた。

「ふざけるな！！貴様は私達の目の前で人を殺しただろ！何の躊躇いもなく！」

「そんな奴が安全に保護なんて言葉言うなんて嘘以外考えられないだろうが！！」

その罵声を聞いたアスカは下を向き何やらぶつぶつ言っていた。

「何を呟いている！！」

シグナムが怒鳴った次の瞬間。

「『カオス・ドーム』」

ブオン！！

「な、何だこれは！？」

突然、声が聞こえたと思ったら、辺りがまるで次元の歪みに吸い込まれたような空間に変わっていた。

「貴様！一体何をした！！」

「転移してるんだ、静かにしてくれ」

「！？」

シグナムの叫びにアスカは殺気混じりの目でシグナムを見据えた。

その目を見たシグナムは今まで感じた事の無いような寒気と震え、そして、恐怖に襲われた。

「着いた」

「え？」

アスカの呟きを聞いたなのは達は何の事か分からず疑問の声をあげた。

すると、今まで見ていた空間が消え何処かの森らしき場所が現れた。

「さあ、此処なら思い切ってやれるぞ。リミッターを解除しても大丈夫だぞ」

「何！？何故貴様が我らの事知っている！」

シグナムの反論にアスカは素早く答えた。

「貴方達の事ならあそこで死んだ転生者に聞いたんですよ」

『!?!』

全員の頭の中にあの時の悲惨な光景が浮かびあがって来た。

「あの時の俺は、リミッターが付いてたから目の前に居たあいつ等を相手にするだけで精一杯だったんだ。

だから、援軍としてデリートに居て貰ったんだよ」

そう言つてアスカは、獣、改めデリートの肩をポンポンと叩いた。

「それで、君達は何しに来たの？」

アスカの言葉で全員がハッ！と自分達のやることを思い出した。

「アスカ君、スバルは何処？」

「其れを知つて如何する気？」

なのはの問いにアスカは問いで返した。

「え？」

なのはは、アスカの言っている意味が分からなかった。

「あの子がもし、君達の所に戻りたくないって言ったら、如何する？」

『!?!』

アスカの発言で全員が目を見開いた。

「スバルがそんなこと言うわけねえだろうが!!」

「そうよ!勝手なこと言わないで!!」

ヴィータとティアナがアスカに反論した。

が、ティアナの心には言葉とは裏腹にもしかしてと、スバルは私達と一緒に居たくないんじゃないかと、思ってしまう。

そんなティアナの心を見透かしたかの様に、アスカが核心をついた。

「なんでお前らにそんな事が分かるんだ?」

「!?!」

「お前らはいいつじゃない、あいつもお前らじゃない、なのになんで、あいつの気持ちが分かるんだ?」

「そんなの、仲間だから・・・」

「確かに、君達は仲間だ。でも、人はちよつとした切っ掛けで変わるんだよ。だから、彼女はもう、“君達の知っている彼女じゃない”」

アスカの言葉でヴィータ達はもう何も言い返せなくなってしまった。

確かに、自分達は今までいろんな人の心を変えて来た。

フェイト、ヴォルケンリッター、ナンバーズ、皆の心を悪から善に

変えた。

でもそれは、逆もまた真なり。

スバルを善から悪に変える事だつて出来る。

皆がそんな事を考えている時、ティアナがアスカに問いかけた。

「じゃあ、私にも教えてくださいよ。貴方が人を殺した許される理由を」

そう言つてティアナはアスカを見据えた。

「貴方達は、何のために管理局に入ったんですか？」

『？』

アスカの唐突の質問に全員は首を傾げた。

「転生者の君達は何故？神から力を貰つたんならその力で好きなように生きればいいだろ？」

「俺は、転生する前は、何不自由なく暮らしていた。だから、この世界で苦しんだり、悲しんでいる人を俺の手で救いたいから！」

「私は、愛する人を失った。その悲しみでたくさんの人を殺した。だから、私と同じ道を進ませないために私は戦う！そのために管理局に入った」

「俺はただ、腐った管理局を潰す為だ！」

そう言つて彰達は迷いの無い目でアスカを見据えた。

「神は人を生んだ事を後悔し、人を嫌つた。だから、人を裁けるのは人しかいないんだ。人を殺す。其れは人にしかできない裁きなんだ。でも、その裁きを、悪用し、何の罪もない人を殺しちゃうと生きている奴が居る。俺達はそいつらを狩るだけだ」

そう言つてアスカはなのは達に背を向け、何処かに去って行つた。

「待つて！スバルと話をさせて！」

なのはがアスカを追おうとした時。

バアン！ バアン！

『！？』

何処からか銃弾が飛んできた。

その弾丸は、なのはの行く手を阻んだ。

「最近よく、骨のある奴が居ねえんだ。ちと相手してくれよ」

そう言つて、森から銃を持った女性が姿を現した。

『！？』

「一人占めは、ずるいですよ・・・」

「セコイ事すなや、ぶっ殺すぞ！」

『!?!?』

なのは達は本日、何度目かの驚愕に襲われた。

自分達の目の前に居るのは其れは自分達がよく見なれた顔だった。

其処に居たのは……。

「なのはちゃん？」

「フェイトちゃん？」

「はやて？」

其処に居たのは、機動六課の隊長陣に酷似していた。

「殺戮だー!!!」

t o b e c o n t i n u e d

第玖話

未知との遭遇。

今の状況にピッタリの言葉だ。

なんせ、自分の目の前に自分と同じ顔をした人が居るのだから。

「あ、貴方達は・・・」

なのはが恐る恐る聞いてみた。

「あん？テメエ等に名乗るような名なんかねえよ！」

Bannon!

「ッ!？」

又しても、相手は急に攻撃してきた。

何とかかわしたなのは達だが、目の前にはフェイトにそっくりな顔をした女性がチェーンソーを振り上げて、今にもなのはを斬り刻もうとしていた。が、その時。

Bannon!

カン!

「テメエ！人の獲物横取りすんじゃないやねえよ！」

「この子は、私が、殺る」

フェイト?に向かつてなのは?が発砲したのである。

「チツ!じゃあ、あたしはその金髪を殺るかッ!?!」

なのは?がフェイトに狙いを定めた時、フェイト?がなのは?に向かつてチェーンソーを投げつけた。

なのは?は何とか其れをかわした。

「テメエ・・・!」

「殺る気?」

そう言つて二人は睨み合いながらジリジリと間を詰めて行った。

そして、今にも飛びかかろうとした時。

「二人とも、其処までだ」

「!?!?!」

二人の喧嘩?を止めた物が居た。

なのは達は声のする方に目をやると、其処に居たのは。

「スバル？」

スバルと瓜二つな顔の持ち主、蒼であった。

「なんだ、お前かよ、」

「邪魔、しないで」

「殺すで？」

三人は嫌悪感を露にして蒼を睨みつけた。

「お前達が探してる女なら、此方で預かっているから安心しろ」

「てめえ、またそんな嘘を・・・！」

蒼の発言に又してもヴィータが喰ってかかった。

「あいつからお前らに伝言がある」

『!?!?』

「すみませんでした。自分は少しの間帰れません。心配しないでください。ティア、怒鳴ってごめん。以上だ」

なのは達は蒼の話をただ黙って聞いていた。

少しの間、沈黙が続いた。

「スバルは、元気ですか？」

その沈黙を破ったのはなのはだった。

なのはの問いに蒼は何も言わず、ただ頷いた。

その様子を見たなのはは、一瞬寂しそうな顔を浮かべたが、すぐに笑顔で蒼と向き合った。

「スバルの事、よろしくお願いします」

『え！？』

なのはの発言に一同（そっくりさんを除く）が驚愕の声を挙げた。

「良いのかよなのは！？」

「うん、スバルがそうしたいんだったら、私達はもう何も言えないよ。もう私は、道を間違えたくないんだ・・・」

そうやってなのはは、悲しそうな表情を浮かべ、ヴィータ達から目を背けた。

なのはの言う間違いとは、ティアナの兄、ティーダ・ランスターの死でティアナは兄の汚名を晴らす為に強くなるかと自身の体を酷使していた。

なのははティアナが無理をしている事を知っていた。

知っていたのに、なのはは言葉で自分の意思を伝えようとせず、暴力でティアナを傷つけてしまった事。

「だから、スバルが自分から帰って来るま「そんなの関係ねえよ!」え?」

「あたしはただ、あんた達と殺り合いたいだけなんだよ!」

『え〜〜〜!?!?』

なのは達はなのは?の発言で今までの感動的な雰囲気がち壊された。

「なあ、蒼良いдар?」

「ハア、いいだろ、ただし、俺達の任務はあくまでこいつ等を先に進ませない事だ。絶対に殺すなよ」

「え〜!殺しちゃだめなの!?!?」

「私は、それでも、いい」

「チツ!爆殺出来るの、まあええわ、半殺しや!」

そう言つて三人はなのは達と向き合つた。

「じゃあ、我らも混ぜてもらおうか？」

『!?!』

突然の声にその場に居た全員が声のした方に目を向けた。

其処には……。

「桜さん！栞ちゃん！」

「貫鬼君！桜鬼ちゃん！」

其処に居たのは、以前なのは達を危機から救つた桜、栞、貫鬼、桜鬼の姿が有つた。

そしてもう一人。

「お前まで来たのか、“紅”」

「えへへ 来ちゃった」

t o b e c o n t i n u e d

第拾話（前書き）

グダグダです。

それでも、是非見てください。

第拾話

「えへへ 来ちゃった」

そうやって笑っているのは、何処かの軍服を着こなし、オレンジ色の髪の一見、少女にも見える、少年だった。

その姿を見たなのは達は、何度目かの驚愕に襲われた。

その理由は……。

「チツ！今度は、“ティアナ”の偽物かよ！」

そうやってヴィータは舌打ちをした。

「蒼、私達も入れてくれるわよね？」

そうやって桜鬼の瞳がキラんと光った。

「ハア、分かった、ただし、殺すなよ」

「よし！そうと決まれば、あたしはあの栗毛を殺る」

「私は、金髪」

「ほな、あたしは同じ関西弁やな」

「あたしは、そうね、桃色の髪の人かな」

「桜姉さまがあの人なら、私は赤毛の子ですね」

「なら我は、あの槍を持つ少年と手合わせしようか」

「貫鬼があの子なら、私はその隣の子の相手をしますか」

「皆決めるのはやいな〜じゃ、僕はオレンジの子かな」

「なら俺は、残りの二人の相手をしようか」

話の流れで対戦表はこうなった。

なのは？VSなのは

フェイト？VSフェイト

はやて？VSはやて

桜VSシグナム

椀VSヴィータ

貫鬼VSエリオ

桜鬼VSキヤロ

紅VSティアナ

蒼VSザフィーラ・シヤマル

となった。

「あ、そついやまだ名乗って無かったな、あたしは“楓”、んでもつて、こいつが」

「“椿”・・・」

「あたしは、“葵”や！」

そう言つて、なのは？、基、楓達がなのはに名乗った。

「それでは、死合い、開始！」

ダッ！

『ダァー！！！！！！』

蒼の言葉で全員が一斉に動いた。

「ハァー！」

「ハッ！」

ギン！！

シグナムのレバンティンと桜の愛刀“紅桜”が激しくぶつかり合つ。

「ハァー！」

「でやー！」

ガギン！

貫鬼は鬼に変身し、自身の武器である音撃二胡とエリオのストラダーダがぶつかり合い、その隣では鬼となった桜鬼がキャロと戦っていた。

「ハア！」

「フリード！」

「グアアー！！！」

真の姿となったフリードが桜鬼に突進して行き、桜鬼はフリードの突進を真っ向から受け止めた。

「ほらほら、こっちこっち」

「クツ！速い！」

紅と戦っているティアナは、紅の俊敏さに苦戦中。

「フン！」

「グア！」

「ザフィーラ！大丈夫！？」

「問題、無い」

ザフィーラとシャマルは二対一と言つのに圧倒的な蒼に手も足も出せないままだった。

そして、一番の問題であるなのは達と楓達の戦闘では・・・。

「おらおら！如何した如何した！？掛つて来いよ！」

「クツ！（勢いで戦っちゃったけど、レイジングハートもバルディッシュもシュウベルトクロイツも壊れて使えないし、どうしたらクツ!?」

そうなのが考えていると、楓が容赦なしに発砲してきた。

「考え事する時間があるならこっちに集中しろ!!」

「クツ！」

ブウオオオオン!!!!

「フン・・・」

「クツ!?」

チェーンソーを勢いよく振り下ろす椿。

其れを、ギリギリかわしたフェイト。

会話が少なかった。

「ハア、ハア、ハア、ハア、」

「ねえ、もっと、逃げてよ、全然楽しく、無い」

「ハア、ハア、（この子、ハンティングのつもり!? あたしが獲物
つてこと!?）」

そんな会話をしていると、何処からともなく爆発音が連続で聞こえて来た。

「ひ~~~~~い!!!!!!」

「アハハハハ! 待て待て待て待て! アハハハハ!」

こちらではやてが葵に追い掛け回されている真っ最中であつた。

「ハッ!? 行き止りや!」

「クッ!」

「ガア!」

「なのはちゃん!? フェイトちゃん!? 大丈夫!」

はやてが行き止りにたどり着いてしまった時、傷を負ったなのはとフェイトが吹き飛ばされてきた。

「「「鬼ごっこは終わりか?」」」

「「「!?!?!」」」

声に反応して振り返ると、其処には暗い笑顔を浮かべた楓、椿、葵が立っていた。

「もう逃げねえな」

「そろそろ、止めを刺す」

「あれでも、殺したらあかんのちゃうん?」

「「「うんうん!」」」

葵の言葉になのは達は全力で首を縦に振った。

だが、

「別に関係ねえよ!?!」

「関係、無い」

「それもそうやな!」

「「「ええええええ!?!?!?!」」」

楓の発言で蒼との約束が破られた。

なのは達は悟った、終わったと。

「「「死ね」」」

「クッッ!」「クッ」

もう駄目だと思い目を瞑ったなのは達。

だが、何時まで経っても痛みが来ないので不審に思い、恐る恐る目を開けると其処には。

「グッ」

「ッ!」

「クッ!」

苦々しい顔を浮かべている楓達、その足元には大破した楓達の武器が転がっていた。

何が起きたのか全然理解できずキョトンとしているなのは達。

「何をしている?」

「クックックッ!?!」「クッ」「クッ」

なのは達の上から声が響く、その場に居た全員が上を見上げると其処には、異様な威圧を放っている。

「アスカ・君？」

何処かに行った駄音が其処に立っていた。

逆光で顔色は分からないが、明らかに怒っていると云う事だけは理解できた。

しかし、それよりも、なのは達が気になったのは、駄音の後から薄っすらとだけ見えた、無数の透明な人の手の様な物が見えた事だった。

t o b e c o n t i n u e d

第拾巻話

暗黒に包まれた部屋。

その部屋のご真ん中には、長く、長方形の机と背もたれのある椅子が置いてあり、その椅子に、ある人物が座っていた。

「お前が瞑想とは、珍しい事もあるものだな“絶鬼”」

椅子に座っていたのは、以前ミッドチルダを襲った転生者達を皆殺しにした張本人、悪鬼“絶鬼”だった。

「僕にだって瞑想したい時もあるよ“ガドル”」

絶鬼に話しかけていた人物は、地球に現れた転生者を皆殺しにした張本人、“ガドル”だった。

「フン、同類に負けたのがそんなに悔しいか？」

ガンツ！

鈍い音が部屋に響き渡った。

音の発生源は、ガドルの首の真横に後ろの壁に突き刺さった剣になった絶鬼の腕だった。

「僕は負けてない。その証拠に、僕はまで十分の一も力を発揮していないよ」

「お前が本気でなければ、奴らも本気ではない、分かるだろ？」

ガドルの言葉に絶鬼は舌打ちをし、剣を腕に戻し椅子に座りなおした。

そんなやり取りをしていると、部屋の扉が開き、黄金の鎧を全身に纏った男を先頭に、数人の人影が部屋に入り、用意されていた椅子に、全員が座り始めた。

「全員揃った様だな」

黄金の男が鋭い眼光で机の周りに座ってる者と座ってる者の傍らに立つ者達を見た。

部屋に居る人数は、合計14人。

椅子に座っているのが7人、その傍らに立っているのが7人。

「なあ、」

椅子に座っている一人が、黄金の男に話しかけた。

「何時まで俺達は待機なんだ？俺は速く戦いたいんだよ！」

「其れに、早く次の世界を壊しに行きたいしね」

「其れより問題は、あの女が読んだ転生者の子供だ」

「嗚呼、あの竹上駈音と言う小僧」

「そう？僕には面白い子に思えたけど」

「貴方は如何思われます？“マステリオン”」

一人が話し出すと其れを気に座っている全員が話し出し、最後の男が黄金の男の名前を呼び、意見を求めた。

如何やら黄金の男の名前はマステリオンと言うらしい。

「焦るな、決戦の時は近い、時期に、嫌でも戦う時が来る。時期に、な」

そう言つてマステリオンは一人、眠りに付き、残された全員は、暇つぶしに娯楽を楽しんでいた。

side out

side 幻島

今、なのは達の前には、異様な気迫を纏っているアスカ基、駈音が立っていた。

「何をしている」

駈音が何の抑揚も無い声で楓達を見据えた。

「クッ」

「（ガクガクガク）」

「うう、」

楓は痛む手を握りしめ、椿は恐怖のあまり震え、葵は駄音を見て一歩後ずさった。

「もう一度聞く、何をしていた」

「「「・・・」」」

何も答えない三人。

「そうか、じゃあ、眠れ」

ブン、ブン

駄音の言葉と共に駄音の後ろから、半透明の無数の手が楓達に向かって行った。

「クッ！」

「グッ！」

「ガッ！」

半透明の手が楓達の首を掴み、じわじわと力を入れていき、首を絞めていく。

「楓ちゃん！」

「椿！」

「葵ちゃん！」

その光景を見ていたなのは達三人が楓達に駆け寄ろうとすると、三人の目の前に駄音が降り立ち、三人を睨みつけた。

すると、その目を見たなのは達の体が急に動かなくなってしまった。

「何を、したの？」

恐る恐るなのはが駄音に問いかけた。

「視経侵功」
アイ・レイド

「アイ、レイド？」

駄音の言葉をフェイトが続けた。

「すぐにわかるさ」

そう言って、駄音は、さっきとは違いアスカを演じていた時と同じ笑みを浮かべた。

そして、駄音は楓達の方にむかって合ういて行き、すでに気絶している楓達を抱え、何処かにむかって歩きだした。

「待つて！」

体の自由を取り戻したなのはが叫んだ。

すると、意外にも駈音は立ち止り、顎で着いて来いと伝え、また歩き出した。

「「「はあゝ！、待って！」「」」

三人は一度顔を見合わせ、お互いに笑顔を浮かべ、歩いている駈音を追って行った。

t o b r c o n t i n u e d

第拾弐話

なのは達が駈音に着いて行ってる頃、他のメンバーは……。

「フーン！」

「グア!!!」

貫鬼に蹴り飛ばされ、エリオは後ろにある木に激突した。

「ハア、所詮、こんな物か」

そう言つて、エリオから目を背けた貫鬼。

「まあ、そう言わないの。アタシ達とこの子達じゃあ、力量が違うのは明らかじゃない」

少し不満げな貫鬼を桜鬼が慰めて?いた。

その光景をエリオ達は一か所に集まり、シャマルに全員の傷を治してもらいながら見ていた。

「なのはさん、帰ってきませんね」

ティアナが心配そうに呟いた。

「そう言えば、楓さん達も帰ってこないね」

ティアナの呟きが聞こえた紅が言った。

「アイツ等、まさか約束を破ったんじゃない」

「……………ツ!?」「……………」

蒼の言葉に六課メンバーの脳裏になのは達の悲惨な光景が浮かび上がった。

すると突然。

「皆さん……………」

『!?』

何処かから声が聞こえ、何時の間にか六課メンバーの隣に美少年が立っていた。

「如何した？天草」

「駄音さんが皆を呼び戻せって」

「駄音が？」

天草と呼ばれた美少年は、笑顔で駄音からの伝言を伝えた。

「あ！それと、六課の皆さんも連れてくるようにだそうです」

「……………わかった」

一瞬、エリオ達を見た蒼。

その後、了解の返事を天草に返した。

「・・・如何思います？」

蒼達のやり取りを見ていたティアナが隣に居るシグナムに意見を求めた。

「畏かもしれない。だが其れより、主達の事が気掛かりだ。しかし、逃げて主達を探そうにも、監視されている」

そう言つて、六課メンバーは、先程から木の上で此方をジーンと見ているデリートに目を向けた。

「クツ、如何すれば」

「この窮地を脱すれるか、かな？」

「クククククツ!?」「ククククク」

突然の声に驚き、シグナム達は勢いよく声の方に顔を向けた。

「大丈夫です。貴方達の隊長さん達なら、一足先にお待ちになります。もちろん、危害は加えてませんよ」

そう言つて、シグナム達の視線の先に立っていた天草は、ニッコリと笑った。

「・・・分かった。お前達に着いて行こう」

「有難う御座います。では、丁度準備が出来たみたいなので、皆さん行きましようか」

そう言つて、天草は全員を引き連れ、森の中に入って行つた。

side out

side 三人称

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

((((気まずい~~~~~!!))))

あれからまったく言つていいほど、会話が無い。

今、なのは達が居るのは、まだ森の中だった。

あれから何時間経つたのだろうか？

なのは達が駈音に着いて行つてから、彼女達が見ているのはずっと森ばかりだった。

「あ、あの〜」

「ん？」

勇気を出して、なのはは駈音に声をかけた。

「私達は、一体何所に向かっているんですか？」

「僕のアジト、かな？」

そう言っつて、なのはに微笑む駈音。

「ん？」

不意に何かを見つけたフェイト。

「あれ、なんだろう？」

そう言っつて一人その何かに近づいて行った。

「ん？ツ！？」

ザザン！

フェイトは、林の中にある“何か”を覗きこもうとした時、林の中から勢いよく鋭利な刃が飛び出し、フェイトを斬り刻もうとした。

が、寸前の所で駈音がフェイトの腕を引っ張り、自分の方に引き寄せたおかげで、フェイトは傷一つなかった。

「フェイトちゃん！大丈夫！？」

心配したなのはとはやてがフェイトに近寄った。

「あ、あれは、一体……」

怯えたフェイトは、今にも消えそうな声で駄音に聞いてみた。

「この森は、俺とデリートの狩り場だ。だから、獲物を狩るための罠が其処らじゅうにあるから、僕から離れると、死んじゃうよ」

そう言つて駄音はなのは達に向かってウインクをした。

そして再び歩き始めた駄音達。

「着いた」

「……え？」「」

駄音の言葉に三人が疑問の声を挙げると同時に、森から抜け、三人の目の前に広がっていた光景は、

「綺麗……」

三人の目に映つたのは、桜の木が立ち並び、七色の花畑、空に輝く

満月、何とも幻想的な風景が飛び込んできた。

「ようこそ、
狂幻郷へ」

t o b e c o n t i n u e d

第拾参話

「此処で待つてて」

そう言つて駈音はなのは達をとある一室に案内した。

「あ、あのー！」

「ん？何？」

部屋を出ようとした駈音にフェイトが呼び止めた。

「あの、た、助けて戴いて、有難う御座います！」

そう言つてフェイトは駈音に深く頭を下げた。

其れを見た駈音は少し驚愕の表情を浮かべた。

「あ、あのー」

驚愕している駈音を不審に思ったフェイトが恐る恐る声をかけた。

「あ、御免。人に感謝されるの、慣れて無くつて」

そう言つて駈音は少し頬を赤らめ、右手で頭を掻いた。

「オッホン！じゃ改めて、別に良いよ、お礼なんて、其れに、あのまま斬り裂かれてたら、君の可愛い顔が台無しになつてたよ」

「／／／!?」

駈音がそう言つて微笑むと、なのは達の顔が真っ赤に染まった。

「じゃ!そう言つ事で」

そう言つて駈音は部屋を後にした。

「(何だろう、この気持ち、アスカさんの顔が頭から離れない)」

「(スバルが、何でアスカさんを好きになつたのか、分かつた気がする)」

「(でも、なんか複雑やわ)」

「(これが、恋?)」

そんな事を考えていると突然部屋の扉が開いた。

「なのはさん!」

「フェイトさん!」

「主(ちゃん)!!!」

部屋に入って来たのは、途中で逸れたフォワード達とシグナム達だつた。

「皆!如何してここに!」

「天草つて人が先になのはさん達が待つてるからって此処に案内されたんです」

「いや、案内されたのはお前達だけじゃないぜ」

『!?!』

突然部屋に響いた男の声に六課メンバーがドアの方に目を向けた。

「ゲンヤさん!?!」

其処に居たのは、スバルの父であり時空管理局陸士108部隊隊長のゲンヤ・ナカジマが立っていた。

「俺だけじゃね」

そう言つてゲンヤは自分の後を指さした。

其処には、なのはの家族である高町家、元ナンバーズのチンク、ゼイン、オットー、ノーヴェ、デイエチ、ウエンディ、デイド、聖皇教会の騎士カリム・グラシア、カリムの秘書のシャツハ・ヌエラ、フェイトの義母リンディ・ハラオウン、フェイトの義兄クロノ・ハラオウン、フェイトの使い魔アルフ、時空管理局「無限書庫」の司書長ユーノ・スクライア、ゲンヤの娘ギンガ・ナカジマ、そしてこの件に関係の無いルーテシア・アルピーノ、アギト、月村家、アリス・バニングス、東雲家の面々が立っていた。

「皆、如何して」

「駆音が呼ぶようにと」

フェイトの疑問に突然現れた蒼が答えた。

蒼の姿を見た全員が臨戦態勢に入った。

「皆待つて！」

全員をはやてが止めた。

「八神なんでそいつを庇う」

「蒼さん達はスバルを保護してくれてるんです」

なのは達の説得で何とか全員をなだめる事が出来た。

「其れより、蒼さん、駄音って誰ですか？」

はやてが蒼に訊ねた。

「すぐに分かる」

そう言つて蒼は全員を誘導し、とある大部屋に案内した。

「あの、此处で何を」

そう訊ねようとした時、なのは達の目の前に、駄音が現れた。

「アスカ・・・」

その姿を見たゲンヤが呟いた。

「皆さん、ようこそ狂幻郷へ」

そう言って駄音は微笑んだ。

しかし、全員は駄音を睨んだ動かなかった。

「さて皆さん、何か気づきませんか？」

『？』

突然の駄音の質問、しかし、全員質問の意図が分からないで居た。

「あれ？皆さん達は？」

『！』

エリオの言葉で全員がやつと駄音の質問の意図が分かった。

なのは達と共に幻島に来ていたはずの転生者である藤堂彰、龍宮亮
牙、夏目夏菜の三人の姿が其処には無かった。

「彰君達は何処に居るんだい？アスカ君」

大地が駄音に訊ねてみた。

すると駄音の表情に変化が起きた。

「フ、フフフ、フハハ、ハハハハハハハハハハ！！アハハハハハハハハハハハハハハ！！！！」

『!?!』

突然狂ったように笑い出した駈音に全員が恐怖を感じた。

「ハハハハハハ!!ハア、ホントにこの世界の住人は、俺、僕、私、我を楽しませてくれる」

「アスカ、君？」

訳のわからない事を言っている駈音に、恐る恐る薫が訊ねた。

「まずは、其れから始めよう」

「え？」

「僕はね、アスカって名前じゃ、無いんだ。俺の本当の名は駈音、我名は竹上駈音！」

『!?!』

駈音の発言に全員が何度目かの驚愕に襲われていた。

「・・・何で、偽名を名乗ったんだい？」

大地が疑惑の眼差しで駈音に訊ねてみた。

「其れは全員揃ってから。其れまで、これでも見ていきましょう」

そう言っつて駈音が指を鳴らすと、其れと同時に部屋の奥からスクリ

ーンが現れ、そのスクリーンに映像が流れ始めた。

「!?!?こ、これは!?!?」

その映像を見た全員が再び驚愕した。

一体、其処に映っていたのは……。

side out

side 彰

「クソ!なのは達は一体何処に行っちゃったんだ!」

俺の隣で亮牙が悪態をつきながら木に八つ当たりしていた。

何故、俺達がこうなったかと言っと。

俺達はなのは達と共にスバルを探す為にアスカ君が消えた森に来ていた。

そして其処でアスカ君を見つけた。

しかし、突然なのは達とアスカ君が何処かに転移して、なのは達を追うべく俺達はなのは達の魔力を辿って転移した。

でも、転移した場所にはなのは達は居らず、俺達は獣達の声が木霊するジャングルのど真ん中に転移していた。

「シッ！二人とも、誰かこっちに来るよ」

そう言っつて俺達は武器を構え始めた。

「この魔力、なのは達じゃねえな」

「嗚呼、この魔力、なんて禍々しい」

俺はこっちに近づいてくる者の魔力を感じて即座に敵と判断した。

俺が感じた魔力は、人を殺すのを楽しんでいる、そして深い悲しみが混ざった様な魔力だった。

そんな事を考えていると、林の向こうからザツザツと足音が聞こえ始めた。

「俺に任せろ」

そう言っつて亮牙は自身の能力の一つ、ン・ダグバ・ゼバに変身した。

「1、2の、3！」

ガッ！！

亮牙の掛け声と共に林の向こうから巨大な手が現れ、亮牙の体を捕え、強い力で絞め上げて行った。

「グア！？」

「「亮牙！！」」

俺と夏菜は亮牙を助けるべく向かって行った。

夏菜は手に持つ日本刀に炎を灯し、手に斬りかかった。

グワ！！

夏菜の斬撃をもう一本の腕が受け止めた。

「クツ！ 彰！ 今です！」

「嗚呼！ 月牙、天衝！！！」

俺は手に構えている天鎖斬月でその手に斬りかかったと同時に黒い月型の波動を放ち、その腕を斬り裂いた。

「大丈夫か二人とも！？」

「あ、嗚呼」

「ええ」

よかった。と思うのも束の間、林の中から髑髏の面を被り、袖が長くぶかぶかな服を着ている人物が現れた。

「き、貴様は！？」

その姿を見た夏菜が声を上げた。

「夏菜、知っているのか？」

「ええ、あるアニメに登場するキャラクターだけど、私の知ってる彼女より、明らかに魔力量に差があり過ぎてる！」

夏菜の言葉を聞いて、俺はもう一度髑髏の面をした女に目を向けた。

その女はゆっくりと面を外した。

「キメラアアアアアアアアアア！」

夏菜の叫びが森に響き渡り、其れを見たキメラが不気味に微笑んだ。

t o b e c o n t i n u e d

第拾肆話（前書き）

長らくお待たせしました。

狂いし悲しみ、第拾肆話、御覧下さい。

第拾肆話

「キメラアアアアアアアア!!」

夏菜の叫び声が深い森に響き渡った。

「クククツ、お前達か、駄音が言っていた“獲物”というのは」
不気味に彰達を嘲笑うキメラ。

「なんで貴女がこの世界に!?! 貴女はあの時、イアンに敗れ死んだ筈!」

「知りたいか?」

キメラが夏菜を見据える。

以前より強力になったキメラの魔力に圧倒され、後ずさる夏菜。

同じように彰と亮牙も後ずさる。

その様子を見たキメラは、口元に笑みを浮かべながら、夏菜に向かって攻撃を仕掛けた。

「ゴーストARM! オーガハンド!!」

キメラの袖から、先程彰達を襲った巨大な腕が飛び出し、夏菜に向かって行った。

「ッ！？クッ！」

オーガハンドを刀で受け止める夏菜。

其れを見ていた彰と亮牙は、キメラに向かって攻撃を始めた。

「ハッ！！！」

「デヤアア！！！」

「ゴーストARM！ゴーストテイル！！！」

ガン！！

ギン！！

二人の攻撃は、キメラの尾から現れた黒い尻尾によって阻止された。

「なら！月牙天衝！！！」

彰は一旦キメラから離れ、其処からキメラに向けて月牙天衝を放った。

ダークネス・ブレイカー
「暗黒衝破！！！」

亮牙も彰と同じように離れ、キメラに向けて、拳を勢い良く突き出すと、拳から巨大な闇の波動が放たれた。

「フン！ゴーストARM！グル！！！」

キメラに迫って行った二人の攻撃は、キメラではなくキメラの後に現れた巨大な影に飲み込まれた。

「「何!?」」

其れを見ていた三人が同時に声を上げ驚いた。

「如何言う事!?以前のキメラは、あんなARM持って無かった!」
自分の知らないARMを使ったキメラに動揺している夏菜。

しかし、キメラの攻撃の手は止まらない。

「ハウリングデモン!!」

「!?」

バァン!!

キメラの腕はすでにオーガハンドではなく、目を持たない怪物の口
に変わっており、その口から強力なエネルギー弾を夏菜目掛けて放
った。

「きゃあああああ!!!!」

「「夏菜!!」」

エネルギー弾をくらった夏菜は、吹き飛ばされ林の向こうに消えて
行った。

かつて行った。

「待て！ツ！？」

キメラを追おうとした彰を制止する様に周りのツタが彰に襲いかかった。

「何だこれは！？」

「彰！クツ！？」

亮牙が彰の下に行こうとした時、地面からツタではなく炎が発ち上がり、亮牙の行く手を阻んだ。

「お前の相手はアタシだよ」

声のする方に目を向けると、上にある木の枝から自分を見下ろす黒い衣を纏い中の綿が飛び出しているティディベアを抱いている長い金髪の少女が其処に居た。

「てめえ、何もんだ」

警戒しながら訊ねる亮牙。

「だ・か・ら、お前の相手は煉華レンゲがするって、言ってるじゃん！」

煉華と名乗る少女は亮牙に向けて掌から炎を放った。

「チツ！」

「アタシはミストルティン。夢魔よ！」

そう言つてミストルティンは彰目掛けて蔓状の鞭を振り下ろした。

「クッ！」

其れをかわした彰は、瞬歩でミストルティンに近づき、天鎖斬月を振り下ろそうとするが、その斬撃をミストルティンの蔓が受け止め、彰の体にツタが叩きこまれた。

「グハア!!!」

彰は吹き飛ばされ後の木に叩きつけられた。

「弱いわねえ〜アンタ」

「グッ！」

木に叩きつけられた彰に近づき、蔓で彰の胸倉を掴み上げ、再び木に叩きつけた。

「もっとアタシを楽しませてよ」

楽しそうにミストルティンが言うと、彰の体に何度も何度も蔓の鞭を打ち、拷問紛いの行為を繰り返していた。

「（クッ！このままじゃ、殺られる!!!）」

彰は体に打ち込まれる鞭を受け止め、月牙を放ち、ミストルティン

を遠ざけた。

しかし、ミストルティンの体には傷一つ付いていなかった。

「今から俺は本気を出す。（なのは達にも見せていない俺の本気、出来れば使いたくないが、こいつ相手に手加減は出来ない！）」

そう言っただけで、彰は掌を自分の顔に翳した。

すると、赤黒い霊圧が彰の顔を包んだ。

霊圧が消えると、其処には、禍々しい仮面を付けた彰が立っていた。

「ふうん、結構良いじゃん。じゃ、2回戦と行こうか！」

そう言っただけで、ミストルティンが動くと同時に虚化した彰が高速で動き、ミストルティンと激しくぶつかり合った。

t o b i c o n t i n u e d

第拾伍話（前書き）

大変お待たせいたしました。

TPPの事があり、書くかどうか迷ったのですが、この作品をお気に入りに登録してくださっている読者の皆様のためにも、どうにか書きあげる事ができました。

それでは、どうぞ、お楽しみください！

第拾伍話

「こ、これって……」

最初に声を挙げたのははやてだった。

今はやて達が居るのは、アスカ、基、駈音のアジトである、“狂幻郷”。

その一室である会議室の様な部屋であった。

今はやて達は、ある映像を見ていた。

その映像に映っていた者に、全員は驚愕していた。

其処に映っていたのは……。

『月牙、天衝!!』

『フン!!』

『暗黒衝破!!』

『アハハハ!! 当たらないよ!!』

『クツ!?!』

『ほらほら、もっといい声で鳴いてよね!!』

姿が見当たらなかった転生者の三人だった。

「夏菜!!」

キメラの攻撃を受けた夏菜を心配するフェイト。

「アスカ君！　すぐに止めさせるんだ！」

大地が叫んだ。

しかし、駈音は微動だにしなかった。

「駄目だよ」

「何故!？」

目を見開き、大地が駈音に問いかけた。

どんな理由が出てくるのか全員が固唾を飲みながら駈音を見詰める。

「いや、何故って、だって、あいつ等に最近狩させてないから、かな？」

そう言って駈音は首を傾げた。

その返答を聞いたはやて達は、激怒した。

「そんな理由で彰君達をあんな目に遭わしてるなんて、最低だよ！」

なのはが駈音に向かって叫んだ。

その言葉に駈音の雰囲気が変わった。

「そんな理由？」

ゆっくりと椅子から立ち上がり、一步一步、なのは達に近づいて行く駈音。

その異様な威圧になのはは一步後ずさった。

「君達は食物連鎖を知っているだろ？ あれと同じ事だよ」

「何を言って……………」

「この世界では、弱肉強食。強き者が弱き者を喰らう。それが常識だ」

「でも、其れは人間には関係ないやろ！」

「人間には関係ない。それは、人間が勝手に決めたルールだ。ここ、狂幻郷では、地球のありのままの姿が存在する。食物連鎖の頂点は人間。なら、その人間を喰らえるのは、“人間” って事になるね」

そう言つて駄音は笑みを浮かべた。

しかし、その笑みからは、“殺意” それ以外、何も感じとれなかった……。

「おっと、いよいよクライマックスみたいだね」

その言葉に全員が再びスクリーンに目を向けた。

s i d e o u t

s i d e 三人称

『ハアアアアア！！』

雄叫びと共に彰の天鎖斬月がミストルティン目掛けて振り下ろされた。

ギン！！！！！！

しかし、その斬撃は鋭利な鳶によって阻まれた。

「クッ！」

『月牙・・天衝おおおお！！！！！！』

「！？」

ドガアアアアアアアン！！！！！！

『ハア、ハア、ハア、ハア、どうだ。ハア、ハア、ハア』

彰は息を切らせながら砂煙を見詰めた。

やっと終わった・・彰はそう思った。

しかし、まだ終わりではなかった。

斬！！！！

『グフッ！？』

彰は斬り裂かれた。

四方八方から飛び出した蔦と蔓によって・・・・・。

『な・・・に・・・！？』

余りの激痛に彰は膝をつき、刀を杖にし、砂煙を睨みつけた。

案の定、砂煙からアイツが出て来た。

所々焦げてはいるが、略無傷な姿で現れた。

「あゝあ、この服お気に入りでたんだけどな、まあまた駄音に買ってもらえば良いや」

「クッ!？」

一歩一歩ゆっくりと確実に彰に近づいて行くミスルティン。

彰はもう限界らしく、辛うじて保っていた虚化も解けてしまった。

そして、遂に、ミスルティンが彰の目の前に到着してしまった。

「うん、結構楽しめたよ。でも、もう飽きたよ。それじゃ・・・」

ゆっくりとミスルティンは右手を上げると、其れと同時に周りの蔦と蔓が立ち、上の木の隙から射し込む太陽の光が、鋭利な蔦に反射し、妖しく煌めいた。

そして・・・。。。

「バイバイ」

その言葉と後に、ミスルティンは勢いよく上げていた右手を振り下ろした。

それと同時に蔦・蔓が一齐に彰目掛けて襲いかかった。

「クツ（ごめん、みんな。ごめん、なのは・・・）」

彰は眼を瞑り、死を覚悟した。

斬！！！！

「オラア！！！」

亮牙は暗黒衝破を煉華目掛けて放った。

が・・・・・・。

「アハハハハハハ！！ そんなの当たらないよ〜だ！」

いとも簡単にかわされてしまった。

「クツソオオオオオ！！ 何で当たらねえんだよ！！！」

何度も自身の攻撃をかわされ苛立つ亮牙。

すると、今まで飛び回っていた煉華が、木の枝に止まり、亮牙に言った。

「ねえ、お前と戦ってても全然楽しくない！ だから、もう終わりにするよ」

そう言つて、煉華は全身から炎を舞い散らせ、頭上に巨大な火の玉を作り出した。

「ヘッ！！ 上等だ！！ こつちも全力で行くぜ！！」

亮牙は、両手に暗黒の波動を溜め、全身に暗黒の波動を纏わせた。

「そんなんじゃ、煉華には勝てないよ！！」

「そんなの、やってみなきゃ分かんねえだろうが！！」

「だったら、やってみてよ！！」

「嗚呼上等だ！！」

「ハアアアアアアアアア！！！！！！」

獄炎と波動が激しくぶつかり合う。

互角に思われる力量。

だが、其れは、亮牙の勘違いだった。

「やっぱり、つまんないや」

「なっ！？」

煉華の獄炎がみるみる威力を増し、亮牙の暗黒の波動を軽々と圧倒して行つた。

盾となった亡霊たちがまるで雲のように塊となって襲いかかって来たからだ。

ギン！！

「クツ！！」

何とか刀で防いだ夏菜。

しかし……………。

「ゴーストARM！！」

「ツ！？」

突然頭上から声がし、勢いよく上を見上げると、其処にはキメラが不気味な笑みを浮かべ、此方を見ていた。

「スカルフアング！！」

ガン！！

「キヤアアアア！！」

キメラの左腕から現れた動物の頭蓋骨。

それが夏菜を襲った。

そのまま夏菜は数メートル遠くに吹き飛ばされた。

「クッ！」

夏菜はボロボロになりながらキメラを身構える。

しかし、身構えた先にもうキメラはいなかった。

「これで、終わりだよ!!！」

「ハッ!？」

キメラの声に反応し、後ろを振り返る夏菜。

だが、時既に遅く、キメラのハウリングデモンが夏菜の顔面を捉えていた。

「ggood - bye?」

「クッ! (ごめん、彰、亮牙、アタシ、もう駄目だよ・・・バイバイ・・・)」

ダアアアアアアン!!!!!!

森に響き渡る三つの悲惨な音。 哀しき、三人の運命は如何に!

t o b e c o n t i n u e d

第拾陸話（前書き）

大変長い間お待たせしてしまい申し訳ありません。

やっと描けました。

では、御覧下さい。

第拾陸話

スクリーンに映るのは、舞い上がる砂煙。

そして、その映像をこの世が終わったかのような表情で見ているのは達。

何が起きた？

その文字が全員の頭を過った。

「はい、これにて終劇」

緊迫した空気を破ったのは、未だ無邪気な笑みを浮かべている駈音だった。

「いや、案外粘ったね。すぐ終わると思ったけど、いやいや、良く頑張りました」

駈音は座っていた王座から飛び退き、手を叩きながら、スクリーンには映っていない彰達に賛美の言葉を述べた。

「アスカ君……」

そんな駈音に最初に話しかけたのは

「ん？ 何かな？ フェイトちゃん」

相も変わらずふざけた様な返答に、呼びかけたフェイトの表情は暗

い物から沸々と湧き上がる怒りでの物に変わった。

「なんで・・・なんでそんなにも、平気で居られるの？ 人が死んだんだよ！？ 辛いなの！？ 苦しくないの！？ アスカ君には良心が無いの！？」

フェイトはすごい剣幕で駄音に迫って行った。

その接近を駄音の傍らに立っていた蒼と紅が阻もうとしたが、その行動を駄音が制止させた。

「どうなの！！ 答えてよ、アスカ君！！！！」

駄音の前に立ったフェイトが叫んだ。

フェイトの気持ちは全員にも分かる。

何故駄音は人の死を見てもあんなに平常で居られるのだろうか・・・。

何故駄音はあんなにも楽しげなのだろうか・・・。

全員が今すぐにも駄音に飛びかかりたい気持ちを抑え、フェイトの質問の答えを駄音が述べるのを待った。

「うん。 僕だって辛いよ、苦しいよ、悲しいよ。 でもね、其れは“誰かが死んだ時にでる気持ちだよ”」

『えっ？』

駈音の言葉に全員が困惑した。

誰かが死んだ“時”？ いや、だって、今さっき彰達は死んだじゃないか。

誰もがそう思った。

しかし、そんな全員の心を見透かした様に駈音が不敵に笑った。

「連れてお出で！」

駈音は奥の部屋に向かって呼びかけた。

コツコツと複数の足跡が駈音達に近づいて来る。

次第に大きくなってくる足音。

そして、奥の闇からスウッと現れたのは……………。

「椿・・・？」

闇から現れたのは、フェイトに瓜二つの人物、椿。

そして、椿の後ろには先程まで全員が死んだと思っていた……。

「彰君!？」

其処に居たのは、医療ベットに横になり、椿に運ばれて来た彰達だった。

「彰君!! 大丈夫!？」

「夏菜!! しっかいいりして!!」

「亮牙君!! 大丈夫!？」

なのは達が医療ベットの上で眠ったままの彰達に急いで駆け寄って行った。

「大丈夫ですよ。彼らはただ眠っているだけです、その内に目を覚ますと思いますよ」

そう言つて、彰達の傍らに居るのは達に近づいて行った駈音。

「本当に……?」

目に涙を溜め、駈音に訊ねるのは。

「うん！ 本当だよ」

そんななのはに子供の様な笑みを向ける駄音。

「ッ！／＼／」

その笑みを見たなのはの顔が真っ赤に染まって行った。

「それじゃ、全員揃ったし、そろそろ話そうか」

そう言っつて再び駄音は王座に腰を降ろし、全員に目を向けた。

『（彰（君）（さん）達がこんな状態でも話をするんだったら、居ない段階から話せばいいじゃないか』

全員が心の中でそう思った。

「最初に言っつた通り、私の名はアスカではなく駄音、竹上駄音だ。それは皆様ご存知ですね？」

駄音の言葉に全員が頷いた。

「そして、僕も彰君達と同じ、転生者である。さらに、僕は君達管理局から危険視されている。此処までは、皆知ってるよね？」

駄音の言葉になのは、フェイト、はやての三人が苦い顔を浮かべ、全員と共に頷いた。

「なら、ここから先はお前達に始めて話す事だ。一言一句逃さず

「聴きとれよ?」

生唾を飲み、喉を鳴らす全員。

「俺は、この世界に来る前は、死刑囚だった」

『!?!』

駈音の予想だにしない言葉に全員が驚愕した。

「僕の罪状は、殺人。 殺した人の数は」

人差し指を顎に当て、少し考えるそぶりを見せる駈音。

「あゝ、フフツ、覚えて無いや」

「ツ!」

駈音の言葉に激怒したシグナムがレバンティンおんげきフルトを向けようとしたが、
其れより先に貫鬼と桜鬼が音撃吹道と音劇二胡をシグナムの首下に
突き付け制止した。

「殺した理由は、ただ人の肉が“食べたかった”から」

『ツ!?!?』

駈音の言葉を聞き、全員が怒りではなく恐怖に包まれた。

「なんで、そうなっちゃたの?」

此処で今まで何も言わなかった薫震えながら駈音に話しかけた。

訊ねられた駈音は一瞬驚いた様な表情を浮かべたが、すぐに平常に戻り、薫の質問に答え始めた。

「最初は、皆と同じだった。殴られれば痛いと感じ、痛みで涙を流した。でも、生活環境が悪かったんだよ。僕が4歳の頃だった・・・」

昔を思い出しているのか、駈音は目を瞑り淡々と語り始めた。

「いつものように、僕は外に遊びに行つたんだ。いつもと変わらない日だった。空は晴れ、白い雲が幾つも空を漂い、街を吹き抜ける風がとても気持ち良かった。でも、突然の猛スピードで走つて来た車に乗っていた男に車の中に連れ込まれ、抵抗できないまま僕は気絶したんだ。目が覚めると、僕は体が縛られ、暗い部屋の中に閉じ込められてたんだ。恐怖で涙がこみ上げて来たのを覚えてるよ。そんな時、部屋の扉が開いて、光が部屋一面を照らすと同時に、部屋に数人の大人が入つて来たんだ。しかも、その中に外国人が何人かいたんだ。もう、怖くて怖くて仕方無かった。僕を見た外国人が隣に居た人に何か話しかけてたんだ。話が付いたのか、その話してた二人が握手を交わして、その後、外国人が相手にアタツシケースに入つたお金を渡してたんだ。その後すぐに僕は拘束を解かれ、とある一室でその外国人に襲われたんだ」

『えッ!?!』

駈音の暴露の全員が驚愕した。

「襲つたって、どう言う・・・」

た」

駈音はニヤリと笑った。

「殺して焼いて食って、殺して焼いて食って、其れを延々と繰り返し続けていると、何時の間にか俺は日本に帰ってきてたんだ。帰って来た時には、もう6年もの月日が立ってたんだ。俺は、久しぶりに昔の俺を取り戻し、俺の家に向かって走った。家に付いたら絶望したよ。あの親、俺の事何か忘れて、施設から俺の代わりに子供引き取って育ててやがった」

駈音はと閉じていた目をゆっくりと開いた。

その目には、明らかな悲しみと怒りが籠っていた。

そんな駈音を見た全員が、駈音を直視できないで居た。

「ドアを開け、家の中にゆっくりと歩んで行った。リビングに付くと、二人とも驚愕して俺を見たよ。見た途端、喜んだんじゃ無く、焦ったんだよ。実の息子と其れを忘れるために引き取った赤他人の子供。喜んでくれたらまだ良かった。焦るって何だよ、八八八、精神論より、世間体を選んだんだよ。八八八八八、其れで俺は、全員殺した。父も母も施設のガキも、皆殺した。八八八八、殺して、食ってやった。其れで、俺は完全に人を捨てた」

最低な世界だろ？ そう言って駈音は笑った。

その笑いは、歓喜ではなく、悲しく、醜く、哀れなほどに、同情を誘う物だった……。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第拾陸話（後書き）

カーリー「アタシ、再び参上!！」

作者「此処からどう狂わそうか・・・」

カーリー「ちょっと、作者！ 久しぶりにアタシが登場したのよ！
？ もっと喜ばなさいよ!！」

作者「殺すぞ・・・」

カーリー「フ、フン！ その手には乗らないわよ!! もうアタシ
は、貴方には威圧されないんだから!！」

作者「（チツ）だったら、次回のカーリーの登場シーンカットで「
ごめんなさ〜〜い!！」という事で、皆さん楽しみにして
やってください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0441t/>

狂いし悲しみ

2012年1月14日05時45分発行